

伊藤直美、セーカーチ・アンナ、チョマ・オルショヤ

子ども・音楽・芸術 ～ハンガリーと日本～

セーカーチ夫人ヴィダ・マーリアと羽仁協子の交流を通して



伊藤直美、セーカーチ・アンナ、チョマ・オルショヤ

子ども・音楽・芸術 ～ハンガリーと日本～

セーカーチ夫人ヴィダ・マーリアと羽仁協子の交流を通して

発行：リスト・ハンガリー文化センター、ナジ・アニタ所長

翻訳：伊藤直美、セーカーチ・アンナ

目次

1. 序（セーカーチ・アンナ）
2. セーカーチ夫人ヴィダ・マーリアと羽仁協子の紹介（セーカーチ・アンナ）
3. ハンガリーでの保育園における造形美術教育の状況
 ヴィダ・マーリアの経歴の始まり（セーカーチ・アンナ、チョマ・オルショヤ）
4. ハンガリーにおける羽仁協子の活動（セーカーチ・アンナ、チョマ・オルショヤ）
5. 1960年台の日本、ヴィダ・マーリアと羽仁一家（セーカーチ・アンナ、チョマ・オルショヤ）
6. 1960年中頃までの日本における幼児音楽教育（伊藤直美）
7. ハンガリー人の目から見た日本の造形美術教育（セーカーチ・アンナ、チョマ・オルショヤ）
8. 1965年以降の日本の幼児音楽教育（伊藤直美）
9. 個人的な回顧（伊藤直美、セーカーチ・アンナ）
10. 年表（伊藤直美）

序

2021年5~6月にかけてリスト・ハンガリー文化センター東京の企画により、「子ども・音楽・芸術 ～ハンガリーと日本」というタイトルでの講座シリーズがオンラインで発表された。この講座シリーズは、フォライ・カタリン、セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア、羽仁協子の繋がりの中で、第二次世界大戦後数年という時期、相違する世界観をもつ二つの国において、ハンガリーを訪れた研究者たちが何を観察したか、また逆に日本を訪問した研究者たちはどうであったかを紹介している。芸術教育が実を結ぶまでに、観察から始まり研究を通してその成果を発表・出版への、両国における道筋を述べた研究発表であった。

この講座シリーズの中のふたつの講座が、さらにその先へと研究調査を重ねた。それをここに掲載する。伊藤直美（音楽教育者、音楽専門通訳・翻訳家、Pro Cultura Hungarica 文化勲章受章）が、日本におけるコダーイの考えに基づく音楽教育の広がりについて、その導入から約半世紀を時系列で紹介する。Dr. セーカーチ・アンナ（日本学者）はセーカーチ夫人ヴィダ・マーリアの娘、チョマ・オルショヤは音楽療法士でヴィダ・マーリアの孫にあたるが、この二人は幼児の音楽と芸術教育というテーマを通し、1950年末からの日本とハンガリーの文化領域における結びつきや繋がりについて述べる。

この研究には、日本語とハンガリー語の専門書、家族のもとにあった手紙、また出版物に未掲載の写真を使用し、それにより当時の日本とハンガリーの世界を読者の身近にもたらそうという意向をもつ。

このハンガリーと日本との文化交流に係る研究は、リスト・ハンガリー文化センター東京の協力により一般公開される。所長ナジ・アニタ氏と同センターの皆様にご心からの御礼を申し上げます。

セーカーチ夫人ヴィダ・マーリアと羽仁協子の紹介

セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア(1916-2000)



1. セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア（1963年、東京）

セーカーチ夫人ヴィダ・マーリアは、幼児期における複合芸術教育の先駆者の一人である。芸術教育と心理学の実験を伴い、芸術教育の意義とそのトランスファー作用を証明した。

ヴィダ・マーリアは 1930 年代末、ハンガリーの学校教育の改革者であるカラーチヨニ・シャーンドル（1）のサークルに入り、コダーイの業績を知るようになった。1941 年、ハンガリーの美術大学を絵画教師とグラフィックのディプロマを取得し卒業。学業と並行して絵本を作成。コダーイ自身からの許可を得て、その民謡蒐集から選んだわらべうた遊びに挿絵を入れ、本を作成する。ナジサロンタでのコダーイの蒐集から選んだ唱歌の本を制作。1951 年、トビリス（ソ連）で芸術学の博士課程を修了。保育士養成校、教育大学を経て、ELTE 大学の教育学部で教えた後、同心理学学部で教鞭をとった。ヴィダの研究の主となるものは幼児期の芸術教育である。1960 年前半 5 年を日本で過ごし日本での幼児期の芸術教育を観察した。その折、地方の学校を訪問したり、学術会議の参加や文筆活動もした。後に、日本での調査・観察とそこから得たことを、ハンガリーでの教育活動や研究調査に反映させた。また、日本での経験を『日本の子どもの美術』と題した本にまとめた。帰国後、保育園、その後小学校で複合芸術教育を実践しながら調査研究した。

1966 年から保育園の年少クラスを対象に、写生の分野で試験的プログラムを作成し、保育士のための講習会をブダペストや地方で行った。複合芸術教育について、また幼児の精神的成長についての ELTE 大学におけるセミナーは成功を博した。芸術教育のトランスファー作用に関しては、その成果を学術会議で発表し、その記事は何か国語かで発表されている。バルコーツィ＝プレー (2) の心理学的効果の調査を依頼され、コダーイの音楽教育効果を分析し、ケチケメートにおけるヴィダ自身の実験調査と結びつけた (3)。

羽仁協子(1929-2015)



2. 羽仁協子（白梅幼稚園で 1969 頃）

羽仁協子は自由な精神をもつ学校である自由学園で育った。バイオリンを奏し、学園のオーケストラを指揮し、また指揮者斎藤秀夫のクラスで学んだ。卒業後ウィーンで、その後ライプツィヒで学び、1958 年からハンガリーに住んだ。協子は父である歴史家羽仁五郎を通じ、コダーイ・ゾルターンの知己を得た。音楽学者ヴァルジャシュ・ラヨシュの下で 1 年間学び、また 1967 年まで ELTE 大学で日本語を教えた。ハンガリー語を完璧なほどに身に付け、文学書の翻訳をした。現代文学を日本語からハンガリー語、ハンガリー語から日本語へと訳し、両国の文芸思潮を紹介。また、近代日本の短編を集めてアンソロジーを編纂した。

1960 年頃から、羽仁はハンガリーを訪れる日本の音楽学者や音楽教師を案内し、通訳もした。1963 年に東京で開催された ISME（国際音楽教育学会）では、セーニ・エルジェーベトの通訳と案内をし、翌年のブダペストでの ISME でもアクティブに参加し通訳した。1967 年、帰国したと同時期に音楽教育関係書の翻訳を依頼さ

れた。これにより、コダーイの考えに基づく保育園・幼稚園の音楽教育を日本に知らしめ広めることを決意。そのためフォライ・カタリンに援助を依頼し、フォライはこれに応じた。

「コダーイ芸術教育研究所」を設立。日本の若い保育士や音楽教師が単独あるいはグループでハンガリーにおいて学ぶことができるよう多くの援助をした。ハンガリーの教育法を広めるため、数えきれないほど多くのハンガリーの音楽教育に関する書物を邦訳した。コダーイの理念を伝える保育園を設立し、ハンガリーの専門書を邦訳し、伝統的な日本の歌を使うことを通し、コダーイの考えに基づく日本における幼児音楽教育の礎を築いた。

ヴィダ・マーリアと羽仁の繋がり

ヴィダ・マーリアが、ELTE 大学で同僚の羽仁協子と知り合ったのは 1959 年末である。その後ヴィダが家族と共に日本へ行くことになった時、羽仁は様々なアドバイスをし、到着後は羽仁の家族に引き合わせた。ヴィダは羽仁一家と懇意になったことにより、進歩的な考えをもつ人々と知り合うことができた。その後、羽仁が帰国し、ヴィダがハンガリーに戻ってから 2 人の友情は続いた。

注

(1) カラーチョニ・シャーンドルについて

コントラ・ジェルジ著「良く知られた教授カラーチョニ・シャーンドル」ゴンドラト出版 2009 年

タムシュ夫人モルナール・ヴィクトーリア『カラーチョニ・シャーンドルのライフワークにおける芸術教育の質問』pdf 無料ダウンロード可 (docplayer.hu) 2021 年 9 月 28 日ダウンロード済み

(2) バルコーツィ・イロナ、プレー・チャバ共著『コダーイ音楽教育法の心理学的影響の研究』ケチケメート コダーイ研究所 1977 年

(3) 当初の計画では、心理学からのみではなく、言語、数学、絵画からの研究も含まれていた。絵画面からの研究はセーカーチ夫人ヴィダ・マーリアが担当し完了し、本も著した。（バルコーツィ・イロナ『バルコーツィ・イロナとプレー・チャバ共著「コダーイ音楽教育法の心理学的影響の研究」に基づく古い研究の回顧』neveles_belivek (tankonyvtar.hu) 2021 年 9 月 28 日ダウンロード済み）

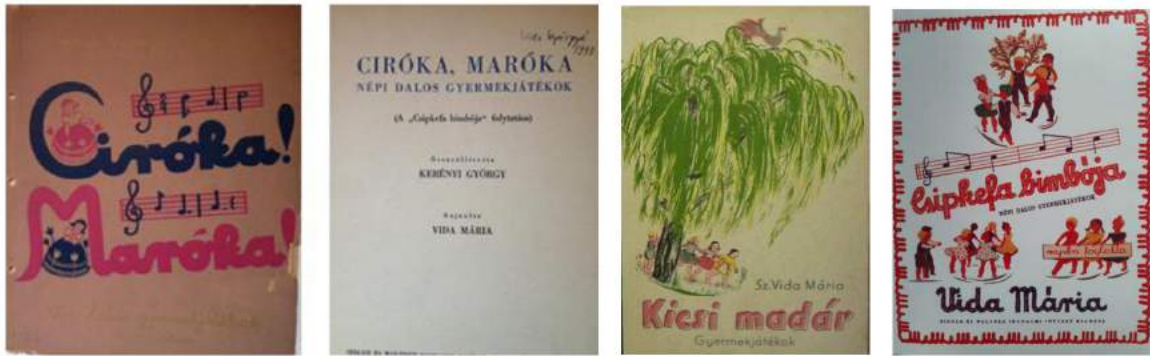
保育園における造形美術教育の状況、ヴィダ・マーリアの経歴の始まり

戦後、乳幼児保育園や学校の制度は大きく変化し、指導目的も変わった。教育機関は国有化され、画一的なカリキュラムと単一のイデオロギーという背景を形成した。イデオロギーは社会主義労働党が決定した。戦後、女性は子どもを養育しながら就労したことから、朝6時から夜6時まで開いている乳児保育園（0～3才）や保育園（3～6才）が必要であった。学校では学童保育のシステムが組織された。教育の目標は、ソ連を範例とした社会主義的な人間像の実現であった。保育園の美術教育において絵を描くこととは真似をすることで、パターンを模写させた。

戦前の著名な教育者の一部は（すでに世間によく知られ権威を持っていたため）指導者としての地位にとどまることができた（例えばコダーイは音楽教育の領域で）。しかし第二次世界大戦前に全国的に知られた教育者で教授であったカラーチョニ・シャーンドルは1948年閑職に追いやられた。カラーチョニ・シャーンドルは民衆文化から出発する芸術教育を信奉しており、コダーイの民族音楽に基づく教育と文学教育とを関係づけ、芸術教育の複合を大学の講義でも著作でも強調した。カラーチョニの業績は、1952年没後、教え子たちの業績を通し広がっている。

その教え子の一人がヴィダ・マーリアである。ヴィダ・マーリアは20歳（1936年）からカラーチョニのブダペストでのセミナーに参加している。そのセミナーでは発達、創作、思春期の社会心理学、文学、映画、劇場についてがテーマであった。カラーチョニの考え方は、ヴィダ・マーリアにとって学習と教授のプロセスについての大きな体験であった。カラーチョニは周りに集まる若者に、読むこと・考えること・議論することだけではなく、課題を与え、真の共同体を築いた。ヴィダはこのサークルでコダーイの業績を知った。このことについて次のように記している。

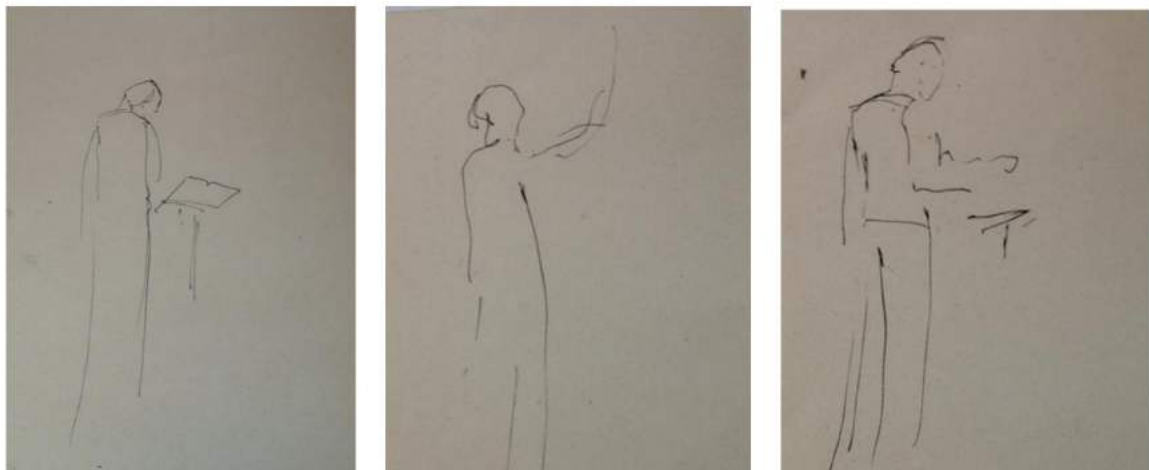
「サークルでは皆、民謡を歌っている。私はコダーイの講演『幼稚園での音楽』とその著作の大ファン。コダーイとバルトークの音楽には大きな影響を受けた。カラーチョニの教え：子どもには民族文化とクラシックを！言語の場合も、音楽の場合も。この考えを基に、私はコダーイの同意を得て、『バラの木のつぼみ』と『なでなで』という音楽入りわらべうた遊びの絵本を作った。その後、コダーイがナジサロンタで蒐集した唱え歌から選び、『青豆コロコロ』という題で絵本を描いた。」（1）



3. ヴィダ・マーリアの著わした、歌うわらべうた遊びの本

ヴィダ・マーリアは美術大学では画家セーニ・イシュトヴァーンの生徒であったが、さらに、ヴァルガ・N・ラヨシュの下でグラフィックそして木版画や銅版画を学んだ。大学入学前に、グラフィック・デザイナー、イラストレーターとして絵本が出版されている。1941年に絵画教師のディプロマ取得。1945年保育士養成校で教え始め、翌1946年からソ連で学ぶ。グルジアで幼児芸術教育を学び、これをテーマとした論文を書いた(2)。コダーイ・ゾルターンの1947年ソ連訪問時、ヴィダは合唱リハーサルに通訳をし、リハーサル中にコダーイを描いた。そのうちの一枚をコダーイ夫人エンマに所望された。その時のことを、ヴィダ・マーリアは母親に次のように書き送っている。

「きのう、リハーサルの時コダーイの絵を描きました。エンマ夫人から1枚ほしいと言われたので、児童合唱団を描いた絵の中で一番良い絵を、今日、彼女に差し上げます。」



4. コダーイを描いたヴィダのスケッチ (レニングラード1947年)

ソ連から帰国し、教育大学の美術科で教え初め、その後1952年にELTE大学の教育学科に招かれた。そこでは、「幼児教育」「芸術教育」「青少年文学」などの科目を担当した。雑誌『保育園の教育』に記事が掲載され、1955年7-8月号に「保育

園でのわらべうた遊び」という題で、ブダペストの保育園で催された大規模なわらべうた遊びや踊りについて書いている。その催しにはコダーイも列席していた。この記事でヴィダは、ハンガリー民謡大観1巻の「わらべうた遊び」にも触れている。この本が保育園にほとんど行き渡っていないので、少なくともコダーイの書いた序文を保育士と幼児教育科の全員が読むことを必須としなければならないと提案した。その記事の最後では、多くの仕事を担ったこの催しの企画者に、その中でもフォライ・カタリンに次のような謝辞を述べている。

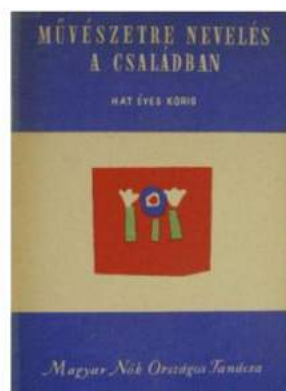
「そして、弛まぬ立派な仕事に対し、民芸運動の若く熱気あふれる戦士である音楽教師ヴィカール夫人フォライ・カタリンに感謝をしたい。」(3)

ヴィダ・マーリアは、コダーイの概念を幼児の美術教育にまで拡大し、動きと文学教育を結びつけようとした。

「私たち親は、完成した形を子どもに教えてはいけない」と書いている。(4)

ヴィダは大学講師としての仕事の中で保育士ともつながりを持ち、保育園での教育の実践に携わっていた。フォライ・カタリンが保育園の音楽教育面で活躍していることについてもよく知っていた。1960年にヴィダによる『家庭での芸術教育-6才まで』という、視ることに関する指導をテーマとした本が出版された。その本では、3歳児の絵や描写の発達を観察され、彼らが絵を描いたり作っているところを描写し、子どもの創作を紹介した。その目的は、両親を含めた大人が、視覚や動きを通して子どもを観察するよう促すことであった。次のように述べている。

「子供たちに音楽の母語を教えるのと同じように、美術の母語も教えなければならない…彼らにお話を語ると、昔話の世界がその作品や絵に反映される。」(5)



5. セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア「家庭での芸術教育-6才まで」

注

- (1) セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア「自画像ー背景」ボドル、プレー、ラーニ編『ハンガリーの心理学者たちの自伝』より p.269 Pólya 出版 1998 年
- (2) 博士論文「子どもの創作過程でのグラフィックの固定 芸術教育の懸案」1948 年 トビリシ 指導教官 Dito Uznadze (心理学研究所教授)
- (3) セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア「保育園でのわらべうた遊び」p.272-273 保育園の教育 1955 年 7-8 月号
- (4) セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア「家庭での芸術教育 -6 才まで」p.33 Magyar Nők Országos Tanácsa 1960 年
- (5) セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア「家庭での芸術教育 -6 才まで」p.52 Magyar Nők Országos Tanácsa 1960 年

ハンガリーにおける羽仁協子の活動



6. 園児と羽仁協子

羽仁家は日本でよく知られた、自由主義的で進歩的な考え方を持つ家庭であった。羽仁協子の祖母である羽仁もと子は武家の出身で、キリスト教の学校に通い、後に日本の教育学と女性運動において傑出した人物として知られるようになった。夫の羽仁吉一と 1908 年に『婦人之友』という雑誌を創刊、1921 年には「自由学園」を設立した。この学校は当初、女学校であったが、後に 4 歳から 22 歳までが通う、幼稚園、小学校、高等教育部門に拡大した。模倣ではなく観察が原則である新しい芸術教育を目指した。羽仁協子はこの「芸術と親密な」この学校に通い、バイオリンを学んだ。学校のオーケストラ活動にも参加し、その指揮もした。

指揮を学ぶため 1953 年に渡欧。最初はウイーンで、1955 年からはライプツィヒで学んだ。1958 年にライプツィヒでの学びを終えた後、ハンガリーを訪れた。コダーイについてはハンガリーに行く前から聞いており、学生としてコダーイから直接学

ぶことはなかったが、ハンガリー語も、そしてハンガリーの民俗音楽に基づく音楽教育の思想もたっぷり吸収した。

後にハンガリーでの講演で、コダーイのアドバイスにより、1958年から1年間、音楽学者ヴァルジャシュ・ラヨシュの下、ハンガリー科学アカデミー民俗音楽研究グループに通ったと話している。さらに、ハンガリー語で初めて読んだ本は、コダーイの『保育園の音楽』であるとも述べた。音楽の勉強は1年で終え、1959年からELTE大学で日本語を教え始めた。大学の教員として8年間日本語と日本文化を教えたが、その間にハンガリー語を完璧なほどに学び取った。ハンガリーの文学界に属し、日本現代文学をハンガリー語に訳し、またハンガリー現代文学を日本語への翻訳を通して日本の読者に提供した(1)。

ハンガリーの音楽教育と繋がり、コダーイの概念を学び取り日本で応用するという考えに達したのは、かなり後、羽仁が日本へ戻る時期のことである。9年間ハンガリーで生活し、コダーイが没した時期にその考え方に関心を持ち始めたことを運命的だと感じた。もっと早く始めていれば、日本の子どもへの音楽教育のさまざまな疑問や問いかけに対し、コダーイはきっと助けてくれただろうにと思った。そのため、フォライ・カタリンを指針と仰ぎ、フォライの書いたものを訳したが、そのままではなく、ハンガリーの歌の代わりに日本の民謡やわらべうたを入れて翻案した。

注

(1) ヴィハル・ユディト編『ハンガリーの魂を持った日本人、羽仁協子』バラッシ出版 ブダペスト 2018年

1960年台の日本、ヴィダ・マーリアと羽仁一家

ヴィダ・マーリアは1959年末、カラ・チョニ・シャーンドルのサークルのメンバーである作曲家のケレーニ・ジェルジを通して羽仁協子を知ったが、同時にELTE大学でも2人は同僚となった。1960年に、ヴィダは夫セーカーチ・イムレと共に、3人の子どもを連れて日本へ5年間行くことになった時、羽仁との交友はさらに深くなった。羽仁はセーカーチ一家の渡航の準備を助けた。

1959年、ハンガリーと日本は、戦後途切れていた外交関係を復活させた。その年、まずチャトルダイ・カーロイ公使が日本へ行き、翌年、セーカーチ・イムレが通商部を公使館に設立するため日本へと発った。



7. 左：チャトルダイ・カーロイ公使 右：セーカーチ・イムレ商務参事官

ヴィダ・マーリアは妻として母親として夫について行ったが、美術教育の分野での研究や観察の仕事を日本でも続けたいと思っていた。

「我が子の学校だけではなく、他の場所でも日本の美術教育の現状を観察し日本の伝統を研究することは、私にとって重要な仕事だと思いました。」(1)

セーカーチ夫妻は、6 歳、7 歳、9 歳の子供たちを公使館の近くにある区立小学校に入れ、受け入れ国の言語と文化を学ばせることに決めた。社会主義国の外交官の小学生年齢の子どもはソビエト大使館の学校に通うという取り決めがあったので、このことは、当時、非常に勇気のある決断であった。これが問題化しないよう、ヴィダはソビエト大使館の学校で図画を教えることを引き受けた。子どもたちは日本の学校に通ったので、ヴィダは日本の初等教育のすべての分野を見知ることができた。



8. 東京でのヴィダ・マーリアと3人の子ども（左からペーテル、マリカ、アンナ）

ピアノが中心的な役割を果たす音楽の授業や、運動とスポーツの重要性、そして図工の授業の特色を見学した。ハンガリーの図画の授業は 45 分で、生徒は個人個人で絵具や色鉛筆で描いていたのであるが、日本では何時間にも渡り、時には共同作業でされたし木版画もあった。この授業の名前も両国で異なり、ハンガリーでは図画、日本は図画と工作が一緒に教えられることから図工と名付けられている。ヴィ

ダは、環境認識と自然科学の教え方で多くの実験や観察を絵画で認知することに価値を見出した。

日本の学校が終わった後、ヴィダは子どもたちのために午後を「ハンガリーの学校」に充て、ハンガリーの音楽小学校の指導要領に従って教えた。一緒に住んでいた若い日本人小林裕子（現 山田裕子）がヴィダを手助けし、子どもたちに日本語や日常生活での行動などを教え、自身もまたハンガリー語を独学した。したがって、2年目以降、裕子は研究資料の説明や翻訳など、ヴィダの研究活動を多く手伝い、彼女自身の子ども時代の経験も話してくれた。



9. 小林裕子と子どもたちの日本の友達と（1963年セーニ・エルジェーベト撮影）

ヴィダ・マーリアの研究調査は、羽仁家との交友関係を通して大きく助けられた。羽仁の母親節子は、歴史家である夫羽仁五郎や協子の兄弟と共に、協子の祖母の活動を続けていた。両家の間には友好関係が生まれた。ヴィダは自由学園を何度も訪れ、そこで見たことを記録しスケッチし、後にその観察を自身の本で書いている。羽仁家との繋がりを通して、セーカーチ家は多くの進歩的な知識人と知り合い、それにより日本人の発想法や人間関係を理解する助けとなった。このようにして、音楽学者の園部三郎、児童心理学者の乾孝、大学教授の井出則雄、児童書作家の鈴木三枝子、版画家の大田耕士、美術教師でイラストレーターの笠原八重子と知り合った。彼らは皆、ヴィダの研究活動を支援し、その協力を得てヴィダは地方の学校や特色ある実験的な教育現場にも足を運ぶことができた。



10. 児童書作家鈴木三枝子と美術教師・イラストレーター笠原八重子（セーカーチ・アンナ、セーニ・エルジェーベト撮影）

注

- (1) セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア「自画像－背景」ボドル、プレー、ラーニ編『ハンガリーの心理学者たちの自伝』より p.271 Pólya 出版 1998 年

1960 年中頃までの日本における幼児音楽教育

コダーイ・ゾルターンを民俗音楽学者として日本に最初に紹介したのは、音楽学者であり音楽評論家の園部三郎だと考えられる。園部は 1956 年に 8 か月をかけて東ヨーロッパを訪問し、ハンガリーも訪れている。その際、コダーイとハンガリー科学アカデミーで会見した。このことについては、その著『東ヨーロッパ紀行』に記している (1)。「あなたとバルトークのハンガリー民族音楽の研究業績を最初に日本に紹介した一人であるかもしれません。」と自己紹介し、「もうそれは 20 年も前のことで」と続けている。つまり、既に 1930 年代にコダーイ・ゾルターンとバルトーク・ベーラの民謡研究について、園部は日本に紹介したということである。この著作で、ハンガリーの音楽学校を訪問したと園部は書いているが、その音楽教育については何も述べられていない。園部は新しい音楽教育の方法に関し柔軟な姿勢をもち、音楽教育を自国の民謡から始めるというコダーイの考えを好ましく思っていた。

園部三郎は 1955 年から 10 年間、日教組教研集会の講師を務めた。1956 年の教研集会でのテーマのひとつにわらべうたが上がっているが、教育理論の一方法として扱われているのみである。同年、日本音楽創育の会が発足し、音楽教育にわらべうたが初めて提起される。

翌 1957 年に園部は「音楽教育の会」を発足させ、この会と日教組教研集会において、わらべうたによる教育の必要性を説いた。即ち、理論上でわらべうたを扱うことから始まり、実践的応用の方向に進んだということである。

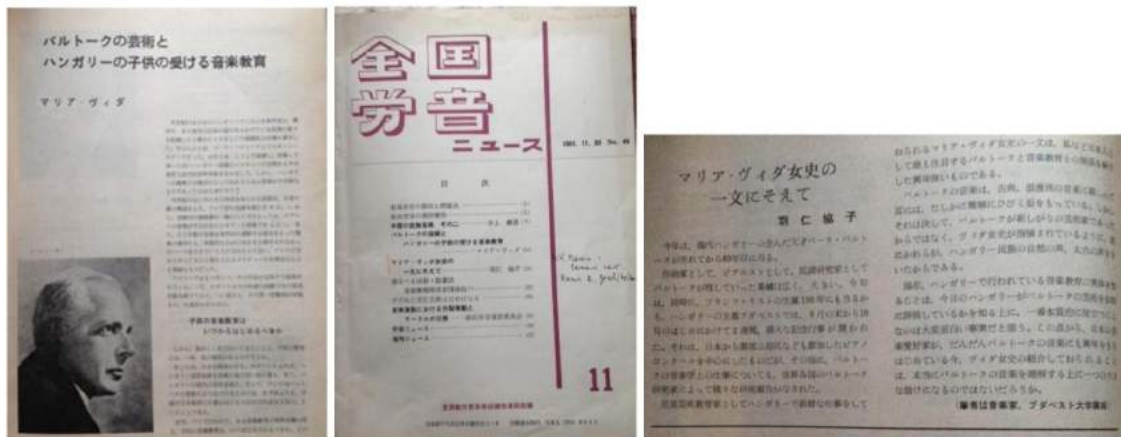
1960 年に民族音楽学者小泉文夫によって、日本民謡の音階構造を明らかにした『日本伝統音楽の研究』が出版された(2)。この著作により、教育者たちは自国の民謡とわらべ歌から始める音楽教育への関心を一層寄せるようになった。

1961 年、小泉文夫を中心とした東京芸大民俗音楽ゼミナールが東京のわらべうたの調査・研究を始めた。この成果は、1969 年に『わらべうたの研究』という題で、研究編と楽譜編に分けて出版された(3)。東京で小学生により実際に歌い遊ばれているわらべうたを蒐集することにより、わらべうたが子どもにとって過去のものではなく、現に子どもたちの間で遊ばれ生きている生の音楽であることを証明し、そこから音楽教育は出発するべきであると提唱した。



11. 『日本伝統音楽の研究』 『わらべうたの研究 楽譜編』 『わらべうたの研究 研究編』

1960 年末日本に着いたヴィダ・マリアは、羽仁家の関係を通して園部三郎と知り合ったが、ヴィダの専門が美術教育であったので、同じ芸術分野の専門家として園部の活動を助けることを自分の課題と感じた。ヴィダは音楽教育に関して具体的には関わっていなかったが、コダーイとバルトークの業績や、コダーイが音楽教育について思い描いた考えを熟知していた。また、ヴィダ自身がコダーイの民謡蒐集から子どものための絵本を作成しているし、保育園の美術教育についても教師として内部から知っており、フォライ・カタリンの保育園での音楽教育に関連する活動を大いに評価していたので、園部と専門的に深く話し合うことができた。さらには、ヴィダの子どもたちはハンガリーでコダーイの考えに沿った音楽の授業が毎日ある音楽小学校に通っていたので、1961 年に園部から労音の音楽雑誌に記事を書くよう依頼された際には、喜んで引き受けた。1961 年 11 月号の全国労音ニュースに「バルトークの芸術とハンガリーの子どもの受ける音楽教育」という題でヴィダの記事が掲載された(4)。この中で、コダーイの音楽教育の基本理念、子どもの音楽教育はいつ始めたらよいか、音楽母語の獲得について、民族音楽に基づく指導についても述べている。この記事は羽仁協子により訳され、さらに羽仁は「マリア・ヴィダ女史の一文に添えて」という題で文章を書いている(5)。



12. 労音ニュースのヴィダと羽仁の記事 (1961)

園部は 1961 年にブダペストで開催されたリスト・バルトーク国際音楽学会議に招待され、再度コダーイに会ったと書いている。1962 年『教育』の「東ヨーロッパの旅から」の中に、この時のコダーイとの会話が記されている。

(コダーイは) 「『キョウコはまだ日本にいますか。』ときくのである。キョウコとは羽仁協子のことである。羽仁協子はぼくが日本をたつ 2 ヶ月前、何年かぶりで日本へ帰ってきたのだが、ぼくの出発する 3・4 日前に、ぼくといっしょにテレビに出たりした。」「それからもふたび彼女のことをきかれた・・・彼女は誰からも愛されているらしい。」(6)

この記事の中で、羽仁がハンガリーの音楽教育について、同じ『教育』の 1961 年 10 月号に書いていると、園部が言及している。雑誌『教育』1962 年 5 月号では、園部は次のように述べている

「嬰兒から幼児、さらに小学校の低・中学年にいたるまでの音楽教育のなかでは、何よりも、わらべうたから出発すべきだという考えは単に理論の段階ではなくて、ようやく実験の段階に達したことは事実である。」(7)



13. 園部三郎「東ヨーロッパの旅から」目次 教育 1962 年

園部は 1962 年に山住正巳と共著で『日本の子どもの歌』を出版しているが、この中でもハンガリーの音楽教育について述べている。

1963 年「音楽芸術」に投稿した『ゾルタン・コダイ 生誕 80 年によせて』では、園部はコダイの音楽教育について次のように書いている。

「ハンガリーの子どもが、ハンガリー語で語り始め、またうたいはじめるという、音楽性への導入課程は、厳然とした事実である。そのことから、もっとも純粋なマジャール族の古謡から、教育を出発するのである。この点は、日本人の場合もすこしも変わりはない。」「コダイのシステムは、そこから出発しながら、…西ヨーロッパ・システムへの復帰の手段ではなくて、ハンガリーの民俗性の追求のなかから、独自の普遍的世界に発展することである。」(8)

このように、園部により「わらべうたから始まる音楽教育」の考え方がコダイの理念と共に語られ、文章や講演を通し現場の教育者に伝えられた。

小泉は理論面からこの考え方を裏打ちした。『日本伝統音楽の研究』の続編として 1962 年から「日本のリズム」を音楽芸術に連載したが、この研究は、没後 1984 年に『日本伝統音楽の研究 2 リズム』として出版された。

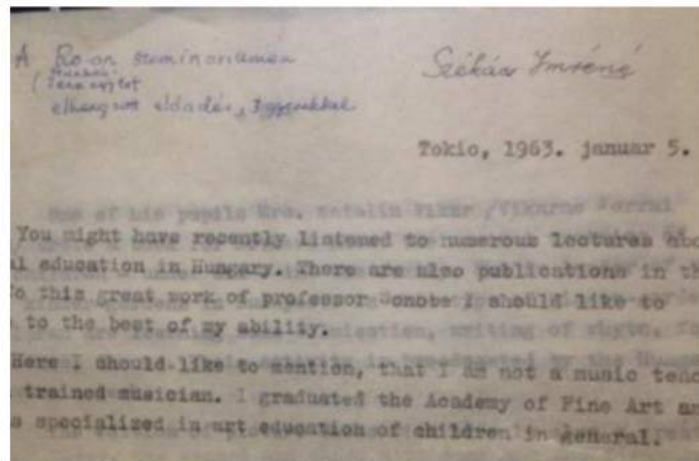


14. ヴィダが描いた 1963 年の ISME での小泉文夫

1962 年には桐朋学園大学ピアノ科教授大島正泰が、ハンガリー歌手チャバイの伴奏者としてブダペストでコンサートをしたが、その折、羽仁協子の案内で 3 週間に渡り保育園、小学校、音楽学校を見学している。

1963 年にはヴィダ・マーリアが、園部の関係する労音セミナーや音楽教育の会などに招かれコダイの音楽教育について英語で講演をしている。テーマは、コダイの教育概念、音楽教師養成、音楽小学校についてであった。音楽小学校に関しては、音楽の授業の内容や流れ、歌唱に基づく指導法について詳細に紹介した。学年ごとに順を追って、ソルミゼーション、ハンドサイン、楽譜の読み書きを説明。ヴ

ィダは我が子3人にその場で実践させた。3人それぞれの学年に合わせ、ハンドサインからメロディーをソルミゼーションしたり、リズム練習を披露した。この講演の中で、フォライ・カタリンが就学前の音楽教育法を具体化し、幼児の音楽発達についての本を書いたことも話している。1968年にフォライは日本で数々の講演をしたが、その参加者の中にはこの1963年のヴィダの講演ですでにフォライのことを聞き及んでいる人々もいた。



15. 上:1963年の講演のための英語での下書き 下:歌う子どもたち

同じく1963年の7月に東京で第5回 ISME が開催され、ハンガリーからはセーニ・エルジェーベトが公式の招待を受けた。講演のほかにセーニに課された重要課題は、1964年に ISME の会議をブダペストで開催すると公式に発表することであった。セーニを案内し、私的な講演の通訳もしたのは羽仁協子であった。セーニは著作『五大陸にて』で、日本での出来事を詳細に記している。その中で、ISME で見聞したことに加え、日本の保育園、幼稚園、学校の見学についても述べている。セーニはこの経験を踏まえて、この後、ハンガリーへ学びに行く日本の若い人たちをうまく導き助けた。

「私の講演のタイトルは『ハンガリーにおける音楽教員の教育』でしたが、一般的な音楽教育の方法について、そしてハンガリーの民俗音楽に関する私の考えも話

しました。」「この後、質疑応答がありましたが、非常に興味深い質問が続き、応答も含めもう1回分の講演に匹敵するものでした。」(9)



16. ヴィダのスケッチ、1963年 ISME で演奏したスズキメソードの子どもたち

セーニは園部三郎の主宰する会でも、羽仁の通訳で講演をしている。ヴィダはコダーイの弟子たちのサークルを通してセーニをよく知っていたので、この日本滞在を助けた。7月11日には、桐朋学園大学の子供のための音楽教室と一緒に見学した後、セーニと桐朋の教師たちとの話し合いを企画した羽仁の妹結子のもとへ出向いた。



17. ヴィダ・マリーアと笠原八重子がセーニ・エルジェーベトを海に案内した（セーニ撮影）

セーニの日本訪問、会議での講演、1964年 ISME のブダペスト開催の公式発表は、両国の関係を音楽を通して近づかせようとしていたハンガリーの文化交流の大きな力となった。この時期から、ハンガリーの音楽家（指揮者、ピアニスト、バイオリニスト）の来日が始まり、ハンガリーの音楽レベルを日本の聴衆に示した。

1963 年秋、谷本一之がハンガリー科学アカデミー民俗音楽研究部門より招待され、「アイヌ伝統音楽」について羽仁の通訳で発表した。発表後、コダーイが最初に「アイヌには文字があるか、ないか」と質問し、「文字はない。すべて口承伝承だ」と答えると、「ああ、それはいい。それが一番だ。」と答えた。そして、「アイヌ音楽の採譜したものがあったら送ってもらえまいか」と依頼した。



18. 谷本一之、羽仁協子、コダーイ・ゾルターン『わらべうたの歩み コダーイ芸術教育研究所 1969-1978』p.22

その2年後、『アイヌ伝統音楽』が日本放送出版協会から刊行され、谷本はすぐにコダーイに送った。このことは、コダーイ生誕百年を記念して在日ハンガリー大使館より発行された小冊子に、谷本自身が書いている(10)。コダーイはその中から41のアイヌの旋律を二声に作曲し、ハンガリーの旋律を含めた『77の二声練習曲集』として1968年に出版された。

酒作りの歌 (谷本『アイヌ伝統音楽』より)



コダーイ『77の二声練習』No.17

Kodály „77 kétszólamú énekgyakorlat” 17.



19. 谷本・増田編著『アイヌ伝統音楽』よりアイヌ民謡とコダーイ『77の二声練習』No.17

前年の東京での発表どおり、第6回 ISME 大会は1964年にブダペストで開催され、名誉会長になったコダーイが講演した。フォライが園児のグループと共にわらべうた遊びをし、民族音楽に基づいた方法と実践を会議参加者に披露し、大きな反響があった。こうしてコダーイの理念による音楽教育が初めて実践を伴って紹介され、

世界中に広まるきっかけとなった。この大会には日本から約 30 名が参加し、羽仁が通訳として助けた。

ISME は 6 月末から開催され、ブダペストではその夏の終わりにもうひとつの学会、国際民俗音楽学会が開かれた。小泉文夫は『世界の民族音楽探訪』の「ハンガリーの音楽」の章で次のように記している。

「コダイの晩年における活躍はもっぱら音楽教育にそそがれ、そうした民俗音楽を土台とし、それを出発点としながら、より広い、豊かな音楽の世界に子供たちを導いていくための方法論を考えていた。」

また、こう付け加えている。「国際会議は非常に有益であった。まだゾルタン・コダイが健在だったから、彼の若い奥さんも一緒に、いろんなパーティーで直接話をするチャンスもあった。彼の後継者であるヤルダニーの方法論によって、ヨーロッパの民族音楽を広くどのような方法で体系化し、分類したらいいかという研究についても大いに参考になる話を聞いた。また討論に参加することもできた。」(11)

小泉の参加した国際会議とは国際民俗音楽学会のことであると、伊藤直美は推測する。

1965 年に加勢るり子がハンガリーを訪問し、帰国後、コダーイ・システム研究会を設立した。その 4 年後、ハンガリーの初等ピアノ教本『ピアノの学校 1・2』を翻訳し、音楽之友社から出版された。

注

- (1) 園部三郎『東ヨーロッパ紀行』 p.132-136 平凡社 1956
- (2) 小泉文夫『日本伝統音楽の研究』音楽之友社 1960
- (3) 小泉文夫『わらべうたの研究』わらべうたの研究刊行会 1969
- (4) セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア「バルトークの芸術とハンガリーの子どもの受ける音楽教育」全国労音ニュースNo.49 1961 年 11 月 20 日
- (5) 羽仁協子「「マリア・ヴィダ女史の一文に添えて」全国労音ニュースNo.49 1961 年 11 月 20 日
- (6) 園部三郎「東ヨーロッパの旅からⅣ」月刊誌『教育』1962 年 5 月号 p.132-135
- (7) 園部三郎「東ヨーロッパの旅からⅣ」『教育』1962 年 5 月号 p.113 月刊誌
- (8) 園部三郎「ゾルタン・コダイ生誕 80 年によせて」音楽芸術 4 月号 p.36 音楽之友社 1963
- (9) セーニ・エルジェーベト『五大陸にて』 Gondolat 出版
- (10) 谷本一之『アイヌ伝統音楽』 p.360 日本放送出版協会 1965
- (11) 小泉文夫『世界の民族音楽探訪』よりハンガリーの音楽 p.222 実業之日本社 1976

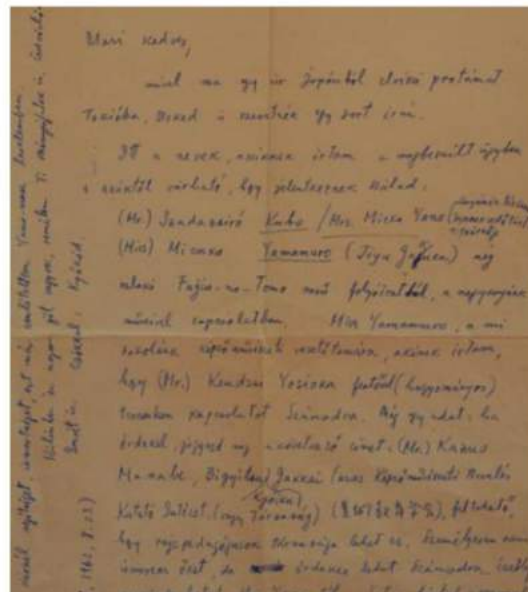
ハンガリー人の目から見た日本の造形美術教育

1960年にヴィダ・マーリアは母親そして外交官の妻として日本に赴いたが、日本の絵画教育や美術教育を詳しく知ろうと試みた。ヴィダはまず我が子の通う^{こが}筈小学校の図工の授業の流れとその記録を絵をまじえて作成し、図工の授業の特徴を観察した。



20. 筈小学校での図工の授業（ヴィダ・マーリアによるスケッチ）

後に、専門家たちの助けを得ることになった。ある部分は友人で児童書作家の鈴木三枝子が、他の部分は羽仁協子が自身の交友関係を動員した。画家で自由学園で教鞭をとっていた吉岡堅二をヴィダと会わせた。羽仁協子は1962年8月23日付の手紙で、美術教育学会と連絡を取るようと、連絡先の名前も付記してアドバイスした。このようにしてヴィダは雑誌『版画』と出会い、購読するようになった。また、芸術教育の専門書を研究し始めた。日本各地の図工の教師に頼んで、子供たちの木版画や紙版画を送ってもらい、整理した。中にはハンガリーの大学に送ったものもあった。



21. 羽仁協子がヴィダ・マーリアに宛てたハンガリー語での手紙（1962年）

ヴィダ・マーリアは、雑誌「版画」に関連して次のように書いている。

「ある号で、楽譜や詩が版画と共にあるのを見つけた。そう、私がずっと前から興味のあることはこれだ。さまざまな表現形態が一緒になっている。学校で、音楽、詩、絵。これは偶然だろうか。それとも意識的な教育結果なのか。」（1）

この疑問を解決するために、様々な学校と直接接触し、学校訪問を通して体験を積み上げた。1963年には専門用語も少しずつ分かるようになり、知り合いも多くなっていった。そういう中、美術教育の改革に取り組み著作もある井出則雄と鈴木五郎と話し合った。井出則雄は彫刻家で、教員養成大学で児童画の発達心理学を教えていた。井出は、「新しい絵の会」の第4回全国学会に参加し講演するようヴィダを招いた。

「新しい絵の会」の学会は1963年8月6日から9日まで、日本アルプスの麓の清里で開催された。この学会には地方や東京から約80人の美術教師が参加した。ヴィダに大きな影響を与えたのは、会のリーダー役を務めた井出則雄の子どもの絵の分析、パターン破壊の原理、絵画創作の子どもへの間接的教育であった。もう一つ重要な講演は、東京の図工教師である鈴木五郎によるもので、小学校入学直後からの図画教育における共同観察とクラスの共同作業の重要性であった。

「鈴木五郎の講演は特に興味があった。ハンガリーではちょうどその小学1年生に図画の授業がないので心が痛んだ。これでは、多くの子どもたちの発達が抑えられてしまう。」（2）

講演もその後の話し合いも羽仁が通訳として助けた。日本の美術教育の過去と現在をもっと深く知りたいのであれば教育現場に直接足を運ぶしかない、ということ

がヴィダにとって明瞭になった。その夏、雑誌『美術教育』が、幼児期の美術教育についてヴィダ・マーリアと井出則雄へのインタビューを載せた。これも、羽仁がコミュニケーションを助けた。



22. 『美術教育』のインタビュー（井出則雄、羽仁協子、ヴィダ・マーリア）

日本の地方の学校での研究、粕川和夫、^{き はく}斎藤喜博

清里の学会の後、セーカーチ家は小林裕子の故郷である小国町（新潟県）を訪れた。その村には今だヨーロッパからの人間が訪れたことがなく、セーカーチの家族の訪問は大きなできごとであった。ヴィダは、村の一番偉い人から肖像画を描くように頼まれ、その後、他の人からも求められた。近くの村で図工の教師をしていた粕川一雄が隣町の柏崎からやってきて、ヴィダと美術教育について話し合った。

「どの地方も、小国町も含めて、それぞれが方言をもっています。勇気を出して自分の方言で話したり書いたりしなさい、と私はずっと前から田舎の子どもたちに言っています。そして、小国町の言葉で絵も描きなさいと。きれいに描こうとしないで。そう思うと、パターンや模写になってしまうから。」(3)と、粕川は教育についての信条を語った。

ヴィダは、「方言」について二人とも同じ事を考えていることに驚いた。遠い日本の小さい村での話し相手が「美術の母語」について述べた考えは、ヴィダが 1960 年の著作ですでに書いた考えと同様で、言語と絵との繋がりを伝えている。この喜ばしい出会いを、粕川の肖像画で表現した。



23. 左：粕川一雄、右：読む老女（小国町でのヴィダのスケッチ）

1963 年 9 月に地方の学校訪問を開始した。ヴィダは児童書作家鈴木三枝子と共に東北へ行った。東北を選んだ理由は、子どもが制作したもっとも美しく興味深い版画があると聞いたからである。山の中にある学校を訪問した時、「友達の顔」というテーマで、ちょうど木版画を作っていた。32 名の 5・6 年生たちが、2 時間使って一緒に作業に取り組んでいた。机には下描き用紙、板木、墨、筆、鉛筆が並んでいた。まず作業の順番を話し合ってから作業に入った。スケッチを描き、板木を彫り、それからみんなで一緒に絵具をつけ、それからまた個人に分かれて刷り上げた。出来上がった作品を教室の壁に貼った。後の話し合いで、その教師は、「版画運動」を始めた大田耕士の本から学んだ、ということを知った。





24. 子どもたちが木版画を創る（上：ヴィダのスケッチ、下：児童の作品）



25. 「友だち」

学校訪問の次の行先は八戸で、木版画サークルを見た後、青森を經由し三本木に行った。そこでヴィダは、三本木の開発者、新渡戸^{にとべつとう}傳を題材とした木版画アルバムを贈られた。児童たちは教師と共に図書館で三本木開発について調べ、その後、その時代の服装や建物、その地域についての下書きを作成。そこから、教師は48枚を選び、児童が彫った。授業後毎日3時間ずつ作業し、1年かかって50ページの本ができあがった。その本の前書きには児童の詩も載せられている。



26. 八戸「うみねこの空」



27. 新渡戸傳をテーマとした木版画アルバム

本州の最北端に位置する下北半島にある小さな学校、川目小学校にまで行くことができた。その沢田教師夫婦と知り合い、川目での話を聞いた。その村には炭焼きを生業とする何家族かが住んでいた。沢田夫婦は、最初はコミュニケーションも困難な発達障害の子どもたちを解放し創造する子どもに育てた方法を、ヴィダと鈴木に話した。これは、作詩、作曲、木版画創作、作文などを総合して働きかける方法で、その関連作用が成果を生み出したということであった。

地方の学校を見学し、サークル活動、音楽、詩、木版画の相互補強作用が、首都から遠く離れた地域で多くの革新的な考えにより現在進行形で追求されていること、また芸術面での完璧さや技術的完成度ではなく、教育そのものが目的であることをヴィダに示した。教師たちは大田耕士や「創造美育の会」の活動を知っている、これはつまり、革新的な運動が日本の各地に広がっていることを意味した。



28. ゆかちゃんがカタツムリを視る（ヴィダ・マーリア 1963 年 9 月 19 日釜石にて）

地方の学校での研究の続き、斎藤喜博

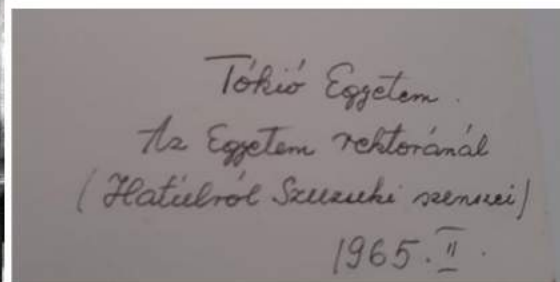
1964 年の春、鈴木三枝子とヴィダは再び地方へ研究の旅に出た。目的は、斎藤喜博校長を訪問し、その総合芸術教育（島村総合教育）を学ぶことであつた。斎藤が校長を 9 年間務める群馬県利根川沿いの島小学校を訪れた。在籍児童 180 人の小学校で斎藤が起こした変化、子どもと親の問題の解決方法について、また教師、親、児童の共同体作りについて教師たちと話し合った。学校生活を撮った映画が上映され、1960 年に写真家川島浩が島小学校を撮った写真集『未来誕生』が、斎藤からヴィダに贈られた。その当時、この本からの写真展が東京で開かれ、斎藤の新しい教育法と島小学校が全国に知られるようになった。斎藤は、授業で中心となるものは精神面での努力とその後に共同で得られる精神の解放だと考え、また、意識形成と芸術教育の間に非常に密接な関係があると考えた。この主張はコダーイの音楽教育理念と一致する。斎藤の教育論は、その著作「授業入門」で詳細に展開されている。

1964 年の 11 月、「創造美育の会」が第 10 回セミナーと絵画コンクールを名古屋で開催した。会長は久保貞次郎で、久保はヴィダを以前から知っていたことから、セミナーとコンクールの審査員としてヴィダを招聘した。審査中に久保と日本の学校の美術教育について話し合ったが、久保は日本の教育に満足しておらず、教師向けの研修と児童心理学の必要性を主張した。



29. 斎藤喜博に関するヴィダの記事（1969）

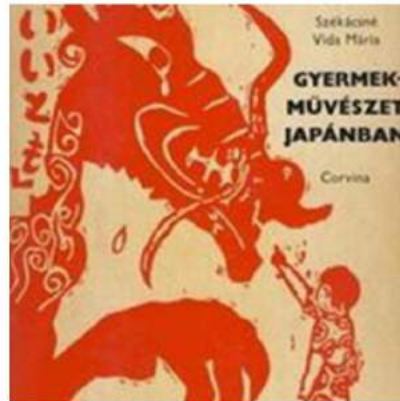
1965 年初頭、ヴィダは再び斎藤喜博を訪れた。斎藤は、音楽教育面では音楽学者園部三郎の示した道、つまり日本のわらべうたに重点を置く考えであったので、ヴィダはバルトークとコダーイの楽譜や、ハンガリーの音楽小学校教材から作成されたテープやレコードをプレゼントとして持っていった。



30. 東京大学学長室で（1965 年 2 月）

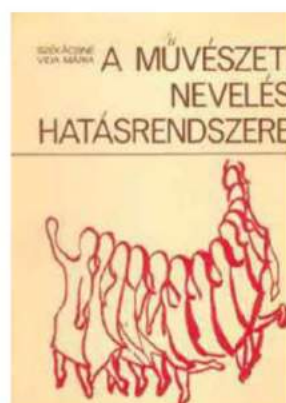
ヴィダの美術教育の考えは、日本へ行く前すでに各分野（音楽、運動、演劇、絵画）に広まっていた。音楽教育の分野においてコダーイの理念は、ハンガリーにおいて比類なく世界的レベルのものであり、美術と文学を一体にする考えは、日本の地方の学校を巡ることによりヴィダが見つけたものである。そこで見たものをハンガリーに持ち帰り、母国において実現できるよう献身した。すでに日本にいる時に研究調査の成果をまとめ始めた。帰国直後、「日本の美術教育についての考え」という題で、ハンガリー科学アカデミーの雑誌に報告を書いた。1971 年に、日本の子どもの絵や木版画とヴィダが日本で書いたスケッチも含め、「日本の子どもの美術」という題でコルヴィナ出版社から出た。この本には羽仁の家族について、さらに 1910 年から 1960 年代までの日本の美術教育の傾向も語られ、時の経過とともに幼児美術教育の重要な基本文献となった。

「日本では、ほかの所よりも、美的教育が教育全体により深く浸透している。しかも、美術教育や図画教育だけでなく、ほかの分野も学校生活を多彩なものにしている。」(4)



31. セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア著「日本の子どもの美術」表紙

1965 年度から、ヴィダは ELTE 大学の心理学学科に転職し、子どもの絵画の発達について教えた。また、幼児から思春期までの複合芸術の許容に関する全領域を研究する子どもの芸術コースを始めた。翌年同僚と共に保育園の大々的な調査を開始した。調査内容は、子どもの絵の発達の中で「なぐり描き」がどのように展開するかということで、「なぐり描き」というジャンルがあることを保育士に認識させることであった(5)。この調査の中には日本で得た体験も含まれていた。ブダペストでは養護施設の子どもたちに歌唱・絵画・演劇を通し、またケチケメートの保育園でも同じ調査をした。これは、ELTE 大学心理学学科でのコダーイの音楽教育理念の心理的影響調査と関連させたものであった。保育士の講習会にも、地方での講習会にも、講師として数多く招かれた。大学教員の勤めと併行し、理論と実践の均衡を保つためには、複合芸術の研究を紹介し保育士と親交をもつことが大切であった。



32. セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア「美術教育の影響作用」研究をまとめた本の1冊

羽仁は 1967 年までハンガリーに滞在し、ELTE 大学で教えた。そして、ヴィダ・マーリアともその家族とも強く結ばれていた。どの作品が邦訳する価値があるかな

どの文学についての議論をし、あるいは音楽や音楽教育の専門分野についての話しをした。羽仁が帰国して後も、手紙という手段で交流は続いた。羽仁が日本で「コダーイ芸術教育研究所」を設立した時、ハンガリーの専門家を日本へ招いた時、ハンガリーへ若者やグループを研修に送った時もお互いに協力し合った。羽仁が初めてフォライを日本へ招聘した時も、ヴィダはその準備に協力した。

フォライ・カタリンの1968年日本訪問後、羽仁は、関屋直美（現 知念）をハンガリーのフォライのもとで研修させることに決めた。その当時、公式にハンガリーに滞在できるよう、セーニガリスト音楽院の自分の学生として関屋を引き受けたが、実際にはフォライの下で学んだ。手続きについて羽仁がセーカーチ夫婦に書いた手紙がある。

「私たちはこれからも、短期・長期に保育士や音楽教師をハンガリーに送りたいのですが、その可能性を、さっき書いたとおりに、5月までよく考えておいてください。どうしてもセーニに名前を借り大学の手続きをしなければなりません。そこは横目で見えて通り過ぎるだけなのに。」



33. 左:ヴィダとフォライの共著『家庭の美術教育』の表紙 右:第二回夏の保育アカデミーの新聞記事（ヴィダとフォライ）

1972年に、ヴィダとフォライの共著である『家庭の美術教育』が出版された。これは、6歳以下の子どもの美術と音楽教育についての著作である。音楽と美術教育を並行して行うヴィダとフォライの調査と研究は、1973年にケチケメートで行われた第二回夏の保育アカデミーで報告され、非常に好評であった。

1970年から羽仁が教師のグループを音楽教育の研修にハンガリーへ送るようになった。研修プログラムにはフォライの幼児音楽教室での実践と講義も含まれていた。研修グループはELTE大学でヴィダの幼児美術教育についての講義も受けた。ヴィダの息子や娘は、その頃から研修グループの通訳として関わり、娘アンナは1984年まで通訳を手伝った。



34. 羽仁協子の研修グループの通訳として手伝うセーカーチ・アンナ

終わりに

ヴィダの芸術教育理念は、日本に行く前からすでに、音楽・運動・演劇・絵画などの芸術ジャンルを総合するものであった。音楽教育の領域ではコダーイの理念はユニークで世界的レベルのものであった。美術と文学の一体化は、ヴィダが日本の地方の学校を訪問し見つけ出したものであった。そこで見たものに魅せられ、母国に持ち帰り、実現するために仕事を続けた。

ヴィダを仕事に駆り立てたのは好奇心で、学ぶ姿勢を常にもっていた。仕事を通していつも他の人を助けたが、ヴィダ自身もまた人々から限らない援助を受けた。ヴィダの人生は、すべての事柄がすべてのものにつながっていた。1964年、名古屋であったセミナーからの帰りの飛行機で、このように記している。

「東京に近づいて、そろそろ飛行機にもなれてきた。富士山の上を飛んでいる。すばらしい景色。真上から見える。飛行機がわずかに傾く。また新しい景色、新しいものの見方、思いがけない喜び、きらりと光る、あ、北斎だ！若い時あこがれた日本の版画家。このように北斎と繋がるとは思ってもみなかった。北斎の見たものが私にも見える。だが、私は飛行機から動きの中で見ている。北斎は、富士山の麓に立っていたのだろう。あるいは、この高い山に登ったとしても、超えることはなかっただろう。それでも北斎は、平面図上に動きを見た。」

注

- (1) セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア『日本の子どもの美術』p.28 コルヴィナ出版 ブダペスト 1971
- (2) セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア『日本の子どもの美術』p.66 コルヴィナ出版 ブダペスト 1971
- (3) セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア『日本の子どもの美術』p.23-24 コルヴィナ出版 ブダペスト 1971
- (4) セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア『日本の芸術教育について』ハンガリー科学 p.7-8, p.492. 1965.

(5) セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア『なぐり描きから私的な繋がり表現まで』ハンガリー教育協会 1970

1965 年以降の日本の幼児音楽教育

羽仁協子は 9 年のハンガリー滞在を終え、1967 年に帰国した。その時期、コダーイの音楽教育理念を研究する藤田恵一らのグループ「半音研」が、フォライの著書を訳してくれるよう羽仁に依頼した。そして次第に羽仁は、日本の幼児音楽教育や保育に深く関わっていくこととなった。

帰国翌年 1968 年、羽仁は、コダーイ芸術教育研究所を設立。日本のわらべうたから始める幼児音楽教育を実践するため、まずは幼児が集団で遊ぶ教材を体系化するための曲選びをした。小泉文夫はすでに東京のわらべうたを多く蒐集していたので、この曲選びに大きく協力した。この後も羽仁は、ハンガリーの音楽教育に関するテーマを持つ本を多く翻訳し、音楽指導に関する本を著した。この年、羽仁はフォライを日本に招聘し、小泉の芸大民俗音楽ゼミナールの合宿にフォライと共に訪れている。フォライはまた、井の頭保育園でのわらべうた課業の公開実践や、北海道でのヤマハ音楽教室講師の勉強会、桐朋学園大学、箱根保問研大会などで講演した。



35. 羽仁がフォライを伴って、小泉ゼミナールの合宿を訪れる

羽仁はこの前後、フォライと手紙を通して、遊びの適齢性や段階性など教育方法についての多大な助言を受けている。

羽仁はまた、ハンガリーでの長期・短期の研修を、保育士、音楽教育者、ピアノやソルフェージュ教師らのために数多くコーディネートし通訳した。研修は、ハンガリーの一流教師や保育士が、羽仁との友情で引き受けた。保育関係の講師では、フォライ・カタリン、ケレスツェリ・マーリアら、音楽教育関係ではカタニチ・マーリア、サボー・ヘルガ、バルタルシュ・イロナ、ヘルボリ・イルディコー、セーニ・エルジェーベトラ、またピアノ教育ではコムヤーティ・マーリアが講師陣として名を連ねている。



36. カタニチ・マーリア、サボー・ヘルガ、バルタルシュ・イロナ、
ヘルボリ・イルディコー（左から）

1969 年には羽仁のコーディネートで今村務、成田智恵子たち 5 名が 1 年間ブダペストで学ぶ。またこの年から関屋直美（現 知念）がフォライのもとで 3 年間学び、帰国後、名古屋コダーイセンターを有志と共に設立し活動している。



37. 羽仁協子、ロズゴニ・エーヴァ、知念直美

1971 年には谷本がハンガリー文化交流協会の招きでハンガリーに滞在して研究をし、翌年には、前日本コダーイ協会会長の中村隆夫がリスト音楽院に 1 年間籍を置いている。

1973 年、第 1 回国際コダーイシンポジウムがアメリカのオークランドで開催され、羽仁が「日本のコダーイシステムの実践」について発表した。またその夏、羽仁のコダーイ芸術教育研究所が第 1 回夏期音楽セミナーを高山で催した。

翌年 1974 年、第 2 回夏期音楽セミナーが三重県員弁で催され、また、同じ年に羽仁がフォライ・カタリンとハンヴァシュ・アンナを招き、朝霧高原で合宿学習が行われた。

1975 年に、コダーイの生誕地ケチケメートで第 2 回国際コダーイシンポジウムが開かれた。国際コダーイ協会 IKS が設立され、日本からは羽仁と谷本が関わった。

この年に大熊進子は町田音楽教室を開いた。それ以前、進子は小学校教員として教えており、音楽の授業でコダーイの考え方を取り入れていた。小学5年生の時に進子の音楽の授業を受けた作曲家で合唱指揮者の松下耕は次のように回想している。

「進子先生はバリバリ、コダーイシステムを使ってました。最初の授業の時、音楽室でどこに座っていいか分からず立ちすくむぼくたち児童の前で、先生は教壇で音叉を片手に、足を組んで座っていました。音叉が珍しくて、その光景が目に焼き付いています。」



38. 町田音楽教室にサボー・ヘルガとロズゴニ・エーヴァを迎えて記念写真

進子は学校に縛られない教育をしたいと学校外でも合唱団を作ったが、自分の理想とする音楽教育をするために教員を辞め、個人で音楽教室を始めた。

1985年にロンドンで開催されたコダーイ・シンポジウムで、進子の合唱団と夫の康夫が指導する弦楽団が演奏し、この演奏を聴いたコダーイ夫人から「日本にコダーイの教育法を正しく伝えて欲しい」と、コダーイの名称を自由に使用する許可をもらった。この時から町田コダーイ合唱団、町田コダーイ音楽教室という名称を使用するようになった。

この音楽教室出身者の中から、その後3名がハンガリーで勉強している。是井良子（現 小林）は1983年から3年間リスト音楽院セゲド分校に在籍。続いて宮本真子（現 デウイット）がウグリン・ガーボルのもとで2年間学び、梅田理雅（現 矢島）は1990年から3年間、セゲド教育大学の合唱指揮科に在籍した。

また、松下耕は1994年にハンガリーへ渡り、合唱指揮をレメーニ・ヤーノシュに、作曲をオルバーン・ジェルジに学んだが、留学の際、進子の世話になったということである。

さて、1975年には、羽仁の招聘だと思われるが、ピアノ教師コムヤーティ・マーリアが公開レッスンを桐朋音大、名古屋音楽学校、富山ピアノ音楽院などで行った。レッスンではコムヤーティから、「ブルクミュラーのような曲を練習させる時間を、もっと価値のある作品に充てなさい。バイエル教則本もある特定された音楽様式を教えるだけです。子どもにはバロックから現代までの幅広い様式を、そしてピアノを通して音楽の楽しみを与えられるように。」というアドバイスがあった。

1976年、伊藤直美はハンガリーへ渡り、前年に開設されたケチケメートのコダーイ音楽教育研究所で学びながらカルドシュ・パール（Kardos Pál）の指導する混声合唱団で歌い、ピアノ教育法をブダペストのコムヤーティ・マーリアのもとに通った。

このコダーイ研究所には第1期生として臼木恵二が在籍し、その後現在まで毎年さまざまな国の学生に交じって日本人も学んでいる。

1976年の夏に谷本を中心とする北海道の音楽教師の会が、ロズゴニ・エーヴァ（Rozsogonyi Éva）を招聘した。当時ロズゴニは、コダーイの理念を実践するケチケメート・コダーイ小学校の2代目校長であった。札幌・東京・名古屋・岡山・福岡でソルフエージュ講習会や合唱指導を行った。

ロズゴニをはじめどのハンガリーの教師もコダーイ・システムを広めるのではなく、音楽芸術そのものの深さと豊かさを伝えてくれた。教師自身に深い音楽教養が備わっていて初めて、子どもに音楽の楽しさと感銘を与えられることを、日本の音楽教師は学んだ。

1978年には日本コダーイ協会が発足し、初代会長に谷本が就任。この協会によりウグリン・ガーボル（Ugryán György）が招聘され、ソルフエージュの学習会が開かれて高いレベルでのソルフエージュ教育を実際に学んだことで、多くの音楽教師が影響を受けた。



音楽をすべての人のものに（コダーイ）

芸術をすべての人のものに（バルトーク）

芸術はすべての人の円満な人格形成のためになくはない手段です。

芸術が一部の人のものになってしまうのは、芸術の基礎が、うたが、ことばが、動きが、十分に深く伝承にねざしていないからです。伝承にねざすということはそこで誰でもが発言し、動き、あらわしてみられるということです。

私たちはこのような理念をコダーイのわらべうた研究の中からくみ取り1968年にコダーイ芸術教育研究所（任意団体）を発足させました。以来多くの方々の共鳴、献身的な勉強、勇気ある実践に支えられて今日に至りました。

ここ十年をふりかえり、日本の文化（教育音楽）がここまで流れてきた方向と、これから流れていこうとする方向を共に正しく感知し、さらなる十年、二十年をますます楽しくにぎやかにうたずきに邁進していきたいものと希い、この小冊子の編さんを思いました。

1979年3月

コダーイ芸術教育研究所

39. 羽仁協子が設立した音楽教育研究所の10周年記念に出版された小冊子（左：表紙、右：見開き）

羽仁はハンガリーから帰国した直後から、わらべうたによる保育を井の頭保育園で実践していた。フォライから、ハンガリーの保育を参考とした0才～5才のための保育園を創立するためのアドバイスを受け、コダーイ芸術教育研究所の実践保育園として、1980年に松の実保育園を開設した。

1981年は日本のコダーイ関係者にとって大きな催しがあった。日本コダーイ協会により第5回国際コダーイ・シンポジウムが8月に札幌で開催され、世界中のコダーイ関係者が札幌に集まった。

セーニが「コダーイの教育理念とその国際的普及」と題して講演し、その他、レンドヴァイ・エルネー、シャーロシ・バーリント、フォドル・アンドラーシュらが講演した。日本からは小倉朗が「日本人のリズム」、間宮芳生は「日本人と声、その考察」、また水野修考は「日本の音楽文化の将来」と題して発表した。また、このシンポジウムの前にセミナーが催され、サボー・ヘルガ、ヘルボリ・イルディコー、ロズゴニ・エーヴァ、オルダシ・ペーテル、アラニ・ヤーノシュという講師陣であった。伊藤直美はハンガリーから帰国していたので、通訳として協力した。



40. ロズゴニ・エーヴァに通訳する伊藤直美 1981年

11月末から1ヶ月間、コダーイ音楽教育研究所副所長で音楽学者のイツェーシュ・ミハーイが来日し、札幌、福島、東京、名古屋で講演した。また藤田恵一が所長を務める藤田音楽研究所のレッスン場開設祝賀会に出席し、藤田の指導する幼児や小学生のレッスンも見学した。

1982年はコダーイ生誕百年記念の年にあたり、前年のシンポジウムに続きさまざまな記念行事の開催で、日本コダーイ協会は多忙を極めた。まずは、半年に渡って日本各地でコダーイの作品によるコンサートが催された。講習会や講演会も企画され、そのひとつとして第1回コダーイ・サマースクールが名古屋で開かれ、ロズゴニ・エーヴァとアラニ・ヤーノシュが講師として招かれた。また11月にはサボー・

ヘルガによる講演と講習会が札幌、東京、福岡で催された。出版行事としては、『よい音楽家とは？』と題されたコダーイ・システムによる授業と合唱指導を録音したレコードがある。大熊進子指導の町田児童合唱団が歌い、ロズゴニによる監修・解説がついている。また、在日ハンガリー大使館から記念の小冊子が出版されたが、その始めのページに、「ハンガリー人民共和国大使館は、本小冊子の編集過程において多くの貴重な助言を賜った羽仁協子氏に対し感謝の意を表します。」という謝辞が載っている。この小冊子は、コダーイとその業績についてハンガリー関係者が書き、日本とコダーイとの関わりを日本の関係者が執筆した貴重な資料である。

この年に始まったコダーイ・サマースクールは、これ以降毎年開催され 13 回まで続いた。4 回目からは羽仁協子が校長となり、事務局を大熊進子が担当し、富士山の見える風光明媚な場所が、ハンガリーからの講師を迎えてコダーイの音楽教育を学ぶすばらしい拠点となった。招聘された講師の中で回数が多い順に挙げると、ウグリン・ガーボル、サボー・ヘルガ、ロズゴニ・エーヴァ、アラニ・ヤーノシュ、カタニチ・マーリア、ヴァシュ・イレーン、エルデグ・マーリアで、ハンガリーにおいて第一線で活躍する教師たちから、参加者は直接指導を受けた。



41. 合唱連盟「子どものための合唱講座」で指導するアラニ・ヤーノシュに通訳する
伊藤直美 1981 年

1983 年、国際コダーイ協会（IKS）の第 2 代会長に谷本が就任し、1991 年まで 2 期務めている。

1985 年に、伊藤直美がコダーイの考え方を日本に応用した音楽教室を名古屋で始めた。わらべうたで始める幼児から 6 年間のソルフェージュクラス、そのあとに続く合唱、ソルフェージュ、オルフ楽器アンサンブルのクラスを組織し、のちに親子で参加する乳児わらべうた教室も開いた。伊藤は大学での教え子やこの音楽教室終了生を講師として育て、現在も続いている。ハンガリーの音楽学校ソルフェージュ

科の教本であるドブサイ・ラースローの『音の世界Ⅳ』は、この教室の大きい子どもたちのために伊藤が訳したものである。

1986 年から、降矢美彌子は福島コダーイ合唱団とソルフェージュグループの指導にウグリンを毎夏招くようになった。2010 年まで実に 23 回、福島でレッスンが持たれた。その成果の一つとして、国際コダーイ協会創立 25 周年を記念し、ウグリンの指導・指揮でバルトーク『児童と女声のための合唱曲集』の CD が、2001 年に制作された。

1988 年にフォライは ISME 会長となり、その翌年、日本コダーイ協会の招きを受け日本に 1 か月滞在、東京および 13 都市約 20 カ所で講演をした。またこの年、フォライの監修したビデオ『音楽はみんなのもの』の日本語版が後藤田純生により制作され、字幕翻訳を伊藤直美が担当した。

この 1989 年から 10 年間、羽仁は日本コダーイ協会の会長を務めている。

ISME 第 5 回幼児セミナーが 1992 年に国立音大で開催され、ISME に幼児部門を設けたフォライ自身も来日した。後藤田の幼児音楽教育研究会で『芸術のもたらす効果ー幼児の音楽教育ー』と題する講演もしている。後藤田は NHK「みんなのうた」の音楽ディレクターとして活躍し、退職後、ISME でサボー・デーネシュの率いるニーレジハーザのカンテムス少年少女合唱団の歌声を聴き、日本の人たちにぜひともこの歌声を聴かせたいと、1992 年に個人で招聘。後藤田の考え通り、彼らの純正な歌声に日本の合唱界は大きな影響を受けた。

その後 1995 年に日本ハンガリー友好協会内の音楽部門として、日本ハンガリー合唱交流委員会が設立され、純生の妹、後藤田夫規子を会長とし、サボー・デーネシュの関係するいくつかの合唱団を入れ替わり招聘。そしてこの交流委員会によるハンガリー音楽教育研修コースも、この年から毎年企画されている。

また、2000 年から隔年で「コチャール合唱コンクール」が後藤田によって企画され、コチャール・ミクローシュ自身が審査委員長となり、5 回開催された。さらに後藤田の企画により、1 年生から 6 年生までのハンガリーの授業を紹介する DVD『ハンガリーの音楽教育 1～4』が制作され、伊藤直美が字幕翻訳を担当した。

1991 年から降矢と伊藤が協同してウグリン・ガーボルを招き、伊藤は愛知県でウグリンを講師に迎えて「合唱セミナー」を 4 回開催した。続いて、ロズゴニ・エーヴァを伊藤は数回招き、合唱セミナーなどを名古屋や広島その他で催し、そのコーディネートと通訳をした。

1997 年には、ロズゴニ・エーヴァとウグリン・ガーボルが日本コダーイ協会佐賀大会の講師として招かれた。

2002 年に、ハンガリーの音楽教育を日本で応用することを趣旨としたコダーイ・ワークショップ名古屋を、伊藤直美が高城敏子と共に立ち上げ、これまでに 23 回開催した。ハンガリーで勉強した人を上げ始めるとキリがないが、長期留学では 1981 年から新谷亮子と上野真理がウグリンの元で学んでいる。またその後、森本覚がリスト音楽院で学び、1993 年からコダーイ音楽教育研究所に学んだ陣内直は、その後リスト音楽院で合唱指揮・高校音楽教師養成科を卒業している。



42. コダーイ・ワークショップ名古屋にて指導する伊藤直美
(左:幼児ソルフェージュ公開レッスン、右:講義) 2018 年

2003 年からヘルボリ・イルディコーのセミナーを佐賀、福岡、大阪などで 8 回にわたり伊藤がコーディネートし通訳。ハンガリーで保育園の音楽授業や小学校の音楽の授業を実際に見てもらいたいというヘルボリの希望で、2012 年からは毎年、ヘルボリが企画し伊藤がコーディネートと通訳を担当して、日本の音楽指導者のためのハンガリー音楽教育研修を実施している。



43. 第 5 回ハンガリー研修 (2018) でヘルボリ・イルディコーに通訳する伊藤直美

伊藤直美：「今回は、園部から始まる約半世紀を振り返ってみた。わらべうたが音楽教育の出発点であることが、日本ではすでに 65 年近く前から何度も教育界で議論されている。なぜ・何のためにわらべうたを出発点とするのか、目的は何なのか、

どこに向かうのかなど、音楽教育が人間教育であることを広くあらためて見直し、議論し、方法論がさらに話し合われることを願う。この研究発表をする上で、多くの方から話を聞き、資料提供をいただいた。調べる過程で様々な文献にあたったが、年代や人名が資料により異なったり誤記があったことから、できるだけ一次資料に当たり、本人に、また故人の場合はそのご家族やお弟子さんたちに聞いて残された資料を探していただき、正確な情報を得るよう努力した。」

個人的な回顧



44. 前列：伊藤直美とロズゴニ・エーヴァ、後列：伊藤直美の両親

伊藤直美「羽仁協子とフォーライ・カタリン」

コダーイ・ゾルターンの考えた音楽教育法に私が初めて出会ったのは 1968 年、フォーライ・カタリンが羽仁協子の招聘により来日し、その講演においてであった。まだ高校生だった私は、外国の人が日本の幼児に日本のわらべうたを指導し、日本語の歌詞で歌うのを見て、大きな印象を受けた。しかし、それが何を意味するか、その時は理解できなかった。一緒に講演を聞いた小学校の音楽教師だった父が、そこで売られていたハンガリーの音楽教育に関する本をすべて購入した。その中に、羽仁協子によって前年に訳・編集されたシャンドル・フリジェシ編「ハンガリーの音楽教育」とフォーライ・カタリン著「ハンガリー子どもの遊びと音楽」、そして羽仁自身による著作「子どもと音楽」（1968）があった。この 3 冊が、後に私がコダーイの理念に基づいて教えるきっかけとなった。



45. 東京でのセーカーチ一家、日本の知り合いと共に

セーカーチ・アンナ

1960年ブダペストのロラントフィ通り音楽小学校で、私はクラスのみんと歌で別れた。「僕の子ヤギ、知ってる？」という歌を日本語で歌った。その歌詞は羽仁協子が教えてくれたもので、家族とともに日本へ発つ前のことだった。日本の小学校で私はまさに日本語を学び取ったが、これは小林裕子が私を含めた兄弟3人を手助けしてくれたおかげである。羽仁協子は時々私たち家族を訪ねてきたので、両家族の交流や連携を私はずっと見てきた。後に、羽仁の活動を私は通訳という形で手伝えることができた。羽仁のグループに、フォライ・カタリンの幼児音楽教室のレッスンや母の講座を通訳した。母とフォライ・カタリンの結びつき、友情、仕事上の共同作業は、まるで私の目の前で起こったことのように感じる。母の仕事について私は多くを知っていたが、この私たちの研究作業では異なる観点から焦点を当てたことから、別の面を見ることができた。母がいかに多くの場所に行き、どれほど多くの人と仕事上の交流をし、なんと貴重なものを母国に持ち帰ったのか、そしてこれらが後になってハンガリーで自身の仕事と方向性に影響を著しく及ぼしたということが、今、私にはよく理解できる。また、この研究をする中で一番うれしかったのは、娘チョマ・オルショヤと共に研究できたことである。

年表 コダーイの音楽教育～日本への導入と広がり～

*は出版物、書籍は『 』、雑誌記事は「 」と区別

1952	*『日本民謡大観』刊行開始（～1993）日本放送協会 編
1956	・園部三郎 東欧を8か月にわたって訪問、ハンガリーでは科学アカデミーでコダーイと面会し、民俗音楽研究所なども訪問 ・第5次日教組(日本教職員組合)教研集 1955～1965年園部三郎が講師として参加、わらべうたが教育論として論じられる ・日本音楽創育の会発足 日本伝統音楽と西洋音楽の問題が反省的に論じられ、音楽教育わらべうたが初めて提起される *園部三郎『東ヨーロッパ紀行』平凡社
1957	・第6次日教組音楽教育部会集会で「わらべうたから始まる音楽教育」が提案される ・音楽教育の会発足（代表:園部三郎）日教組の音楽教育部会を母体として発足
1958	・羽仁協子 ハンガリーでの滞在を開始（ELTE 日本語科教師として1967年まで教鞭をとる）、父 羽仁五郎の仲介でコダーイと会う ・日本音楽創育の会と音楽教育の会が合併し、音楽教育の会となる
1960	*小泉文夫『日本伝統音楽の研究』（音楽之友社） *羽仁協子「ハンガリーの音楽教育」月刊誌『教育』10月号 教育科学研究会
1961	・小泉文夫を中心とした東京芸大民俗音楽ゼミナールが東京のわらべうたの調査・研究を始める ・羽仁協子 一時帰国中に園田三郎とテレビに出演し、ハンガリーについて話す ・園部三郎 ブダペストでのリスト＝バルトーク国際音楽学会議に招待され、コダーイと再度会う *小泉文夫『日本のリズム』を音楽芸術に5月より連載開始 *セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア「バルトークの芸術とハンガリーの子供の受ける音楽教育」『全国労音ニュース』11月号
1962	・大島正泰（桐朋学園大学ピアノ科教授） 歌手チャバイ・ラースローの伴奏者として5月にブダペストでコンサートした折、羽仁協子の案内で3週間に渡り保育園、小学校、音楽学校を見学。 ・音楽教育の会（園部）日本語を出発点とする音楽教育を提唱 *園部三郎・山住正巳『日本の子どもの歌』岩波書店 *小泉文夫「一般音楽教育に関する一つの提案」『教育音楽』音楽之友社
1963	・セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア 労音セミナーや音楽教育の会などに招かれコダーイの理念を紹介、ヴィダの子ども3人も同行しハンドサインやソルミゼーションを披露 ・第5回 ISME（国際音楽教育学会） 東京で開催、セーニ・エルジェーベトが「ハンガリーにおける音楽教員の教育」について講演 ・セーニ・エルジェーベト 桐朋音大付属子供のための音楽教室や小学校などを、一時帰国の羽仁の案内で視察（これらの事柄をセーニは“Öt kontinensen...” 五大陸にて Gondolat 出版 1979年に詳述）、園部三郎主催の会で講演（羽仁協子通訳） ・日教組の大会で「わらべうた骨組成によるソルフェージュ」が提案される ・谷本一之 ハンガリー科学アカデミー民俗音楽研究部門より、3か月に渡り招待され、アイヌ伝統音楽について発表、コダーイ同席 *小泉文夫「わらべうたに結びついた器楽教育を」『教育音楽』2月号 音楽之友社 *園部三郎「作曲家論 ゴルタン・コダイ」『音楽芸術』4月号 音楽之友社 *小泉「新しい音楽教育の出発点」『教育の窓』10月号

	*間宮芳生『子供の領分』（NHKの委嘱による児童合唱と2管編成のオーケストラのための作品）小泉文夫編『わらべうたの研究』より約50曲の素材を使用
1964	・ISME第6回ブダペスト大会（6/25~7/3）で名誉会長のコダーイが講演、コダーイの理念による音楽教育が紹介される（日本から約30名が参加） ・小泉文夫 ハンガリーでの国際会議（8月開催の国際民俗音楽学会と推測）に参加し、コダーイや科学アカデミー民俗音楽研究所所長ヤールダーニと話す
1965	・第10回音楽教育の会全国大会（和歌山）テーマ「わらべうたから出発する音楽教育」 ・加勢るり子 ハンガリー訪問後、コダーイ・システム研究会を設立 *谷本一之・増田又喜 編著『アイヌ伝統音楽』日本放送出版協会（谷本はこの本をコダーイに贈呈、『77の二声練習曲集』の内41曲がこの本に収録された歌をもとに二声に作曲される） *藤田恵一『入門期の音楽指導 - 子どもの遊びと音楽教育』明治図書
1967	・羽仁協子 ハンガリーより帰国 ・半音研で、小山章三(国立音大)、新井精(桐朋音大)、藤田恵一(都留大学)らがコダーイの音楽教育に関する著作を研究、羽仁協子に翻訳を依頼
1968	・羽仁協子 コダーイ芸術教育研究所を設立（わらべうたを幼児の集団での教材として体系化するための曲選びをし、実際に遊ぶ） ・羽仁協子 フォライ・カタリンと文通し、遊びの適齢性段階性などについて助言を受ける ・フォライ・カタリン（招聘:コダーイ芸術教育研究所） 井の頭保育園でわらべうた授業の公開実践、北海道・桐朋学園大学・ヤマハ音楽教室・箱根保研大会などで講演 ・半音研に小林福子・大島久子(桐朋音大)、明星幼稚園・井之頭保育園の保育者が加わる ・教育者グループがハンガリー訪問（小山章三、本間雅夫、藤田恵一ら、コーディネーター：羽仁協子） *フォライ・カタリン他著 羽仁協子訳編『ハンガリー子どもの遊びと音楽』明治図書 *シャーンドル・フリジェシ編、羽仁協子編訳『ハンガリーの音楽教育』音楽之友社 *羽仁協子『子どもと音楽』評論社
1969	・和地由枝 コダーイ芸術教育研究所の所員として加わる ・今村務、中原（成田）智恵子ら5名がフォライ・カタリン、ハンバシュ・アンナ、サボー・ヘルガ、セーニ・エルジェーベトのもとで1年間学ぶ（コーディネーター：羽仁） ・関谷直美（現 知念）フォライ・カタリンのもとで幼児音楽教育を学ぶ（羽仁協子による派遣） *小泉文夫編『わらべうたの研究（楽譜編・研究編）』わらべうたの研究刊行会 *コムヤーティ・マーリアら共編 加勢るり子訳『ピアノの学校1, 2』音楽之友社
1970	・音楽教師のグループがハンガリーで3週間の研修（コーディネーター：羽仁・小林福子）講師：カタニチ・マーリア、サボー・ヘルガ、バルタルシュ・イロナ、ハンバシュ・アンナ、ヘルボリ・イルディコーら *北海道音楽教育の会『わらべ唄と日本民謡による222のソルフェージュ上下』全音楽譜出版社
1971	・音楽教師のグループがハンガリーで1月と3月に研修（コーディネーター 羽仁協子・小林福子）講師：カタニチ・マーリア、コムヤーティ・マーリア、サボー・ヘルガ、ハンバシュ・アンナ、フォライ・カタリン、ヘルボリ・イルディコー、ルキン・ラースローら ・保育関係者のグループがハンガリーで研修（リーダー：羽仁結子） ・谷本一之 ハンガリー文化交流協会の招きでハンガリーに1年間滞在
1972	・関谷直美（現 知念）帰国、員弁（三重県）の保育園、幼稚園、小中学校でコダーイ

	の教育法実践（羽仁による派遣） ・コダーイ芸術教育研究所内にわらべうた連絡会が発足（会長：大塚延子、西谷美和子） ・中村隆夫 リスト音楽院で1年間学ぶ ・羽仁協子 ハンガリーで乳児保育園を見学、ケレスツォーリ・マーリアと知り合う ・大熊進子 第2回国際コダーイセミナー（ケチケメート）に参加 ・大熊進子・庸生^{のぶこ} 町田音楽教室を始める（1985年コダーイ夫人より許可され、町田コダーイ音楽教室となる）
1973	・第1回国際コダーイシンポジウム（アメリカ オークランド）羽仁協子が「日本のコダーイシステムの実践」について発表 ・第1回夏期音楽セミナー（高山）主催:コダーイ芸術教育研究所（羽仁） ・ケレスツォーリ・マーリア 乳児保育の指導(招聘:コダーイ芸術教育研究所)
1974	・第2回夏期音楽セミナー（員弁）主催:コダーイ芸術教育研究所（羽仁） ・フォライ・カタリンとハンヴァッシュ・アンナ（招聘：コダーイ芸術教育研究所）各地で講演、朝霧高原で合宿講習会 ・ハンガリーでの乳・幼児保育研修に保育士45名が参加（コダーイ芸術教育研究所）講師:サバディ・イロナ、ヘルマン・アリス、ペター・ゲーザら
1975	・国際コダーイ協会 IKS 設立（日本からは羽仁、谷本が関わる） ・コムヤーティ・マーリア ピアノ公開レッスン（桐朋音大、名古屋音楽学校、富山ピアノ音楽院などで） ・サバディ・イロナ 幼児教育についての講演と学習会（招聘:コダーイ教育芸術研究所） ・臼木恵二 コダーイ音楽教育研究所(ケチケメート)第1期生として学ぶ ＊フォライ、セーニ著、羽仁協子、谷本一之、中川弘一郎訳『コダーイ・システムとは何か』全音楽譜出版社
1976	・第1回春の音楽セミナー（山梨県塩山コダーイ荘にて）講師：臼木恵二、中川弘一郎、中村隆夫、茂手木節子（日本コダーイ協会） ・ロズゴニ・エーヴァ 札幌・東京・名古屋・岡山・福岡でソルフェージュや合唱講習会（以降、2015年まで15回以上）（招聘：北海道の音楽教師の会、会長:谷本一之） ・伊藤直美 コダーイ音楽教育研究所（ケチケメート）第2期生として学ぶ
1977	・藤田音楽研究所のグループがケチケメートのコダーイ音楽教育研究所にて研修（これ以降1月初旬数日間、定期的に1999年まで） ・神戸にて幼児教室や保育わらべうたサークル活動開始（神戸コダーイ芸術教育研究所の前身） ・保母コーラス ハンガリー保育研修（羽仁協子）30名余が参加
1978	・日本コダーイ協会発足（初代会長 谷本一之 1989年まで） ・ウグリン・ガーボル 東京と福岡でソルフェージュ講習会 招聘：日本コダーイ協会と羽仁協子（招聘予定であったカルドシュ・パール急逝のため） ・フォライ・カタリン ISME 内に幼児委員会を設立、会長に就任（～1982）
1979	＊『日本わらべ歌全集』柳原出版（東京編から始まり全国を網羅した39冊を1987年までに出版）
1980	・羽仁協子 松の実保育園を創立（ハンガリーの保育を参考とした0才～5才のための、コダーイ芸術研究所の実践保育園）
1981	・第5回国際コダーイ・シンポジウム（札幌8月2日～7日）【講演】セーニ・エルジェーベト「コダーイの教育理念とその国際的普及」、フォドル・アンドラーシュ「コダーイの音楽とハンガリー」、シャーロシ・バーリント「ハンガリーの器楽音楽とコダーイ」、小倉朗「日本人のリズム」、間宮芳生「日本人と声、その考察」、水野修考「日本の音楽文化の将来」

	・プレセミナー（7月27日～31日）【講師】アラニ・ヤーノシュ、オルダシ・ペーテル、サボー・ヘルガ、ヘルボリ・イルディコー、ロズゴニ・エーヴァら ・ロズゴニ・エーヴァ 札幌に続き、愛知県尾張地区小中学校教師のための会で講演、参加者1000人余 招聘：伊藤裕規（伊藤直美の父） ・アラニ・ヤーノシュ 札幌に続き福岡（松本節子）、佐賀（十時やよい）、鹿児島（松田昌子）で講習会（以降2000年まで6回来日） ・新谷亮子と上野真理 ウグリンのもとで学ぶ（4～5年間） ・イツェーシュ・ミハーイ 11月から1ヶ月、札幌、福島、東京、名古屋で講演、藤田音楽研究所（所長：藤田恵一）のレッスン室開講式に出席 ＊羽仁『コダーイ・システムによる音楽指導の実際』全音楽譜出版社
1982	・コダーイ生誕100年記念行事（日本コダーイ協会） 半年に渡って全国各地でコダーイ作品のコンサートやハンガリーの音楽講師による講演・講習会 ・第1回コダーイ・サマースクール（名古屋）講師：ロズゴニ・エーヴァ、アラニ・ヤーノシュ（主催：日本コダーイ協会） ・サボー・ヘルガ 11月札幌、東京、福岡にて講演や講習会 ＊『コダーイ 生誕百年1882-1982』ハンガリー人民共和国大使館 ＊町田児童合唱団（大熊進子指導）によるコダーイ生誕100年記念レコード『よい音楽家とは？』ーコダーイ・システムによる授業と合唱指導ー 監修・解説：ロズゴニ・エーヴァ 企画・制作：日本コダーイ協会
1983	・谷本一之 第2代 IKS 会長就任（～1991） ・第2回コダーイ・サマースクール（名古屋） 講師：ロズゴニ・エーヴァ、アラニ・ヤーノシュ 主催：日本コダーイ協会 ・アラニ・ヤーノシュ 講習会（福岡・佐賀・鹿児島・船橋・福島） ・夏の音楽教育講座（藤田音楽研究所）札幌・仙台・山口 ・サボー・ヘルガ <秋のコダーイ・セミナー>札幌、東京、名古屋、大阪（以降2001年まで約15回来日）（招聘：日本コダーイ協会） ＊日本コダーイ協会機関紙（夏に創刊）
1984	・第3回コダーイ・サマースクール（札幌） 講師：カタニチ・マーリア、ロズゴニ・エーヴァ、ラントシュ・イシュトヴァン（主催：日本コダーイ協会） ・カタニチ・マーリア 講習会（福岡・名古屋） ・ロズゴニ・エーヴァ 講習会（福島・船橋） ・降矢美彌子 福島でコダーイ・システムによるソルフェージュ勉強会をロズゴニ・エーヴァの指導の下に立ち上げる ＊小泉文夫『日本伝統音楽の研究2 リズム』（音楽之友社）
1985	・第4回コダーイ・サマースクール（御殿場）講師：ロズゴニ・エーヴァ、ヴァシユ・イレエン（主催：日本コダーイ協会） ・伊藤直美 コダーイの理念を日本に応用した音楽教室を始める（布池文化センターこども音楽教室） ＊ドブサイ・ラースロー『音の世界IV』伊藤直美訳 音楽教育研究協会出版(1989年より全音楽譜出版社)
1986	・第5回コダーイ・サマースクール（山中湖） 講師：ウグリン・ガーボル、エルデグ・マーリア この回より13回まで羽仁協子がサマースクール校長となり、大熊進子が事務局長を務める（主催：日本コダーイ協会） ・ウグリン・ガーボル 福島でソルフェージュを定期的に教え始める（招聘：降矢美彌子）以降2010年まで23回来日 ・民族音楽学者 Dr. メゼー・ユディット 高崎市（群馬）の英語学校 English Academy 付属幼稚園 American Kinder で、コダーイの理念に基づく音楽教育を実践

	(1996 年まで)
1987	・第 6 回コダーイ・サマースクール（山中湖） 講師:アラニ・ヤーノシュ（主催：日本コダーイ協会） ・羽仁協子 福島ソルフェージュ勉強会で指揮法講座（4 月・6 月） ・降矢美彌子 福島コダーイ合唱団を創立（福島ソルフェージュグループと合同で、ウグリン・ガーボルが 2010 年まで定期的に指導）
1988	・フォライ・カタリン ISME 会長に就任（～1990） ・第 7 回コダーイ・サマースクール（山中湖） 講師:ウグリン・ガーボル、サボー・ヘルガ（主催：日本コダーイ協会）
1989	・羽仁協子 日本コダーイ協会会長に就任（～1999 年） ・福岡コダーイセンター設立（神野久子、中島侑子ほか）2006 年に福岡コダーイ芸術教育研究所と名称変更 ・第 8 回コダーイ・サマースクール（山中湖） 講師:ウグリン・ガーボル、サボー・ヘルガ（主催：日本コダーイ協会） ・フォライ・カタリン 11 月から 1 か月滞在し 14 都市約 20 カ所で講演や講習会（招聘: 日本コダーイ協会） ＊ビデオ『コダーイの音楽教育 1～4』（Zene mindenkié フォライ・カタリン監修）日本語版製作：後藤田純生 翻訳：伊藤直美 ＊羽仁協子講演集『いまなぜわらべうたか』ハーベスト社
1990	・第 9 回コダーイ・サマースクール（山中湖） 講師:ウグリン・ガーボル、サボー・ヘルガ（主催：日本コダーイ協会） ・名古屋コダーイセンター設立（知念直美と有志） ・谷本一之 ハンガリー学術文化交流勲章受賞
1991	・第 10 回コダーイ・サマースクール サボー・ヘルガを講師として 13 回まで開催（主催: 日本コダーイ協会） ・ウグリン・ガーボル 第 1 回合唱セミナー（名古屋）招聘・通訳：伊藤直美（1994 年まで毎年名古屋にて、以後佐賀へ移行） ＊岩井正浩『ハンガリーの音楽教育と日本ーフォライ・カタリンとの対話より』（音楽之友社）
1992	・フォライ・カタリン ISME 第 5 回幼児セミナーで講演（国立音楽大学）、幼児音楽教育研究会例会で講演（事務局長: 後藤田純生） ・サボー・デーネシュ カンテムス少年少女合唱団と共にコンサートツアーおよび公開講座（以降定期的に、サボー・デーネシュ指導の合唱団が来日） 招聘：後藤田純生
1993	・キシュマルトニ・カティ 2 年続けて北海道で夏の講習会 招聘: 北海道音楽教育の会（会長 佐藤志美子） ・陣内直 コダーイ音楽教育研究所に 2 年、その後リスト音楽院の合唱指揮科を卒業
1994	・松下耕 レメーニ・ヤーノシュ、オルバーン・ジェルジに師事（～1995 夏）
1995	・ロズゴニ・エーヴァ 名古屋合唱セミナー、佐賀コダーイセミナー（招聘・通訳：伊藤直美） ・日本ハンガリー合唱交流委員会設立 代表：後藤田夫規子（日本ハンガリー友好協会内での音楽の独立した組織として） ・日本ハンガリー合唱交流委員会によるハンガリー音楽教育研修コース（以降定期的に現在まで 1 月最初の約 1 週間）
1996	＊中川弘一郎『コダーイ教育作品』全音楽譜出版社
1997	・日本コダーイ協会全国大会 in 佐賀 セミナーの講師：ウグリン・ガーボル、ロズゴニ・エーヴァ ・谷本一之 小泉文夫賞

1998	・セチェイ・ヘルミナ 講演や学習会 招聘:コダーイ芸術研究所(以降定期的に 2017 年まで)
2000	・第 1 回コチャール合唱コンクール(以降 2008 年第 5 回まで隔年開催、コチャール・ミクローシュ自身が審査員) 後藤田純生企画、主催:日本ハンガリー合唱交流委員会
2001	・佐賀コダーイセンター設立(代表:十時やよい) *サボー・ヘルガ『Japán közelről – Kodály módszer eredményei Japánban.』(近くから見た日本) NKA 出版(ハンガリー)
2002	・第 1 回コダーイ・ワークショップ名古屋(主宰:伊藤直美、高城敏子)以降定期的に開催、2019 年までに 23 回
2003	・ヘルボリ・イルディコー 名古屋、佐賀、福岡他で講習会(企画・通訳:伊藤直美以降定期的に 2010 年まで)
2005	・駒ヶ根コダーイ芸術教育研究所設立(代表:山岸めぐみ) ・フェケテ・マルタ 講演や学習会(招聘:コダーイ芸術教育研究所)
2006	・神戸コダーイ芸術教育研究所が NPO 法人となる(理事長:小林純子)
2007	・伊藤直美 カルドシュ・パール賞受賞
2009	・広島コダーイセンター設立 ・かごしまコダーイ芸術教育研究所設立(代表:佐藤秀代) ・第 19 回国際コダーイシンポジウム(ポーランドカトヴィツ) 中村隆夫が基調講演「日本のコダーイ活動に貢献した先駆者たちの功績を振り返る」
2012	・第 1 回ハンガリー音楽教育研修 ヘルボリ・イルディコー監修企画(コーディネート・通訳:伊藤直美(以降定期的に 2019 年まで 6 回実施)) *DVD『ハンガリーの音楽教育 1~4』(有)ハルモニア(企画:後藤田純生、翻訳:伊藤直美)
2013	・知念直美 フォライ・カタリン賞 The International Katalin Forrai Award 受賞
2014	・羽仁協子 カルドシュ・パール賞受賞

注 (写真)

*敬称を略します

1. セーカーチ夫人ヴィダ・マーリア (東京 1963) (Sz.V.M.*の遺品)

以下、セーカーチ夫人ヴィダ・マーリアを Sz.V.M あるいは Sz.ヴィダ・マーリアと略す

2. 羽仁協子 (白梅幼稚園で 1969 頃) (西ノ内多恵 提供)
3. ヴィダ・マーリアの著わした、歌うわらべうた遊びの本 (Sz.V.M.の遺品)
4. コダーイを描いたヴィダ・マーリアのスケッチ (レニングラードで 1947) (Sz.V.M.の遺品)
5. Sz.ヴィダ・マーリア 『6 才までの家庭の美術教育』 1960
6. 園児と羽仁協子 (ロズゴニ・エーヴァ 提供)

7. チャトルダイ・カーロイ公使とセーカーチ・イムレ商務参事官 (Sz.V.M.の遺品)
8. 東京での Sz.ヴィダ・マーリアと3人の子ども (Sz.V.M.の遺品)
9. 小林裕子と子どもたちの日本の友達と (1963 年セーニ・エルジェーベト撮影、セーニ・エルジェーベトの遺品、リスト音楽芸術大学付属コダーイ研究所アルヒーフ所蔵)
10. 児童書作家鈴木三枝子 (セーカーチ・アンナ撮影)、美術教師・イラストレーター笠原八重子 (セーニ・エルジェーベト撮影、セーニ・エルジェーベトの遺品、リスト音楽芸術大学付属コダーイ研究所アルヒーフ所蔵)
11. 小泉文夫著『日本伝統音楽の研究』表紙、小泉文夫編『わらべうたの研究 楽譜編・研究編』
12. 労音ニュースのヴィダ・マーリアと羽仁の記事 1961 年
13. 園部三郎「東ヨーロッパの旅から」目次 教育 1962 年 5 月
14. ヴィダが描いた 1963 年 ISME での小泉文夫 (Sz.V.M.の遺品)
15. 左:1963 年の講演のための英語での下書き 右:歌う子どもたち (Sz.V.M.の遺品)
16. ヴィダのスケッチ、1963 年 ISME で演奏したスズキメソードの子どもたち
17. ヴィダ・マーリアと笠原八重子がセーニを海に案内 (セーニ・エルジェーベト撮影)
18. 谷本一之、羽仁協子、コダーイ・ゾルターン『わらべうたの歩み コダーイ芸術教育研究所 1969-1978』p.22 (伊藤直美 所蔵)
19. 谷本一之・増田又喜編著『アイヌ伝統音楽』よりアイヌ民謡とコダーイ『77 の二声練習』No.17
20. 筭小学校での図工の授業 (ヴィダ・マーリアによるスケッチ) (Sz.V.M.の遺品)
21. 羽仁がヴィダに宛てたハンガリー語での手紙 (1962 年) (Sz.V.M.の遺品)
22. 雑誌『美術教育』のインタビュー (井出則雄、羽仁協子、ヴィダ・マーリア)
23. 左:粕川一雄、右:読む老女 (小国町でのヴィダ・マーリアのスケッチ) (Sz.V.M.の遺品)
24. 子どもたちが木版画を創る (ヴィダのスケッチ) (Sz.V.M.の遺品)
25. 児童の創作による木版画「友だち」 (Sz.V.M.の遺品)

26. 八戸「うみねこの空」 (Sz.V.M.の遺品)
27. 新渡戸傳をテーマとした木版画アルバム (Sz.V.M.の遺品)
28. ゆかちゃんがカタツムリを視る (ヴィダ・マーリア 1963 年 9 月 19 日釜石にて)
(Sz.V.M.の遺品)
29. 斎藤喜博についてのヴィダの記事 (1969)
30. 東京大学学長を訪問、その後教育学部で話し合い (1965 年 2 月) (Sz.V.M.の遺品)
31. Sz.ヴィダ・マーリア著『日本の子どもの美術』コルヴィナ出版
32. Sz.ヴィダ・マーリア著『美術教育の影響作用』研究をまとめた本の 1 冊
33. 左: ヴィダ・マーリア、フォライ・カタリン共著『家庭内の芸術教育』表紙
右: 第 2 回夏の保育アカデミーについての新聞記事 (左からヴィダ・マーリア、
フォライ・カタリン)
34. 羽仁協子の研修グループの通訳として手伝うセーカーチ・アンナ
35. 羽仁がフォライを伴って小泉ゼミナールの合宿を訪れる (「わらべうたの研究」
楽譜編 iii)
36. カタニチ・マーリア、サボー・ヘルガ、バルタルシュ・イロナ、ヘルボリ・イル
ディコー (左から)
37. 羽仁協子、ロズゴニ・エーヴァ、知念直美 (ロズゴニ・エーヴァ 提供)
38. 町田音楽教室にサボー・ヘルガとロズゴニ・エーヴァを迎えて記念写真 (矢島理
雅 提供)
39. 羽仁協子が設立した音楽教育研究所の 10 周年記念に出版された小冊子 (左: 表
紙、右: 見開き) (伊藤直美 所蔵)
40. ロズゴニ・エーヴァに通訳する伊藤直美 1981 年 (伊藤直美 所蔵)
41. 合唱連盟「子どものための合唱講座」で指導するアラニ・ヤーノシュに通訳する
伊藤直美 1981 年 (伊藤直美 所蔵)
42. コダーイ・ワークショップ名古屋にて指導する伊藤直美 (左: 幼児ソルフェージュ
公開レッスン、右: 講義) 2018 年 (伊藤直美 所蔵)
43. 第 5 回ハンガリー研修 (2018) でヘルボリ・イルディコーに通訳する伊藤直美
(伊藤直美 所蔵)

44. 前列：伊藤直美とロズゴニ・エーヴァ、後列：伊藤直美の両親（伊藤直美 所蔵）

45. 東京でのセーカーチ一家、日本の知り合いと共に（Sz.V.M.の遺品）